



Title	ルイス・ネーミアと一八世紀英国政治
Author(s)	阿部, 四郎; Abe, Shiro
Description	研究ノート
Citation	北大法学論集, 18(4), 102-157
Issue Date	1968-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/27868
Type	departmental bulletin paper
File Information	18(4)_P102-157.pdf



研究ノート

ルイス・ネーミアと一八世紀英国政治

阿部 四郎

はしがき

- 一、ネーミア革命
- 二、ユークリッドの世界
- 三、神話と歪曲
- 四、脇役の伝記
- 五、非ユークリッド的世界
- 六、歴史的デタツチメント
- 七、歴史的アプローチ

あとがき

附 略歴と著作

はしがき

この論稿の試みは、歴史家ネーミアを歴史哲学的諸範疇のいずれかによって位置づけることではない。筆者に歴史哲学の専門たる資格は欠けるが、かりにその資格を想定して、なにかある範疇を彼にあてはめたとしよう。しかし、すぐに、彼のさまざまな両極性は、片意地に自らを別様に表現することになる。また、ネーミアが、彼の歴史哲学のゆえに記憶さるべきなかどうか、それも筆者にはわからないのである。さしあたっては、ネーミア

を、歴史の『理論家』としてではなく、歴史の『記述者』として扱いたいと思う。しかし、歴史哲学的範疇がネーミアには適用不能だからといって、反対の極に進むつもりもない。神学者流の議論は、ネーミア自身が『ジョージ三世即位期における政治構造』のために附したアイスキュロスからの銘句を權威の出所にするかもしれない。そして、歴史記述の究極の方法を発見した歴史家として、ネーミアを神格化するであろう。つまり、従来の歴史家は、彼らの問いと仮説によって在来の事実とその都度新しい答えを提供し繰り返し返してきたが、ネーミアは、新しい方法の発明によって、従来の議論を廃させ、これ限りという答えを提出したのだと。が、こういった議論に加わることも、この論稿の目的ではない。

まことに、ネーミアは、彼の生前中から、さまざまな形容辭のもとに呼称されてきたのである。ネーミアは、人間行動の原因を、公言された動機の外にあるなにかに帰せしめたがゆえに『歴史のマルクス』と、また、隠された動機に帰せしめたがゆえに『歴史のフロイト』と、さらに、精神や観念をこえたなにかに帰せしめたがゆえに『歴史のダウイン』などと呼ばれてきた。これらのネーミア像は、彼の精神的教父を探索することによって、ネーミアを全体として規定できる便利な範疇を求めたので

ある。もちろん、これらの形容辭は、あらゆる形容辭と同じように、補助手段としての便利さと一面の眞理はもっている。しかし、この論稿の試みは、それらのネーミア像の中からいずれかを選択し、論証することではない。また、ネーミアの特徴の一つを強調して、ネーミア像を単純、鮮明化することでもない。そういった試みは、しばしば、器用な論理操作によって、中世的注釈者の陥穽にはまり込むだけではなく、なによりも、ネーミアという人間、作品を生み出す歴史家の個性を味けない皮相なものにしがちだからである。⁽¹⁾

ネーミアは、歴史家としても、シオニストとしても、彼が最も望んだ仕方では遇されず、挫折と失意にある孤独で神経症の人であつたらしい。⁽²⁾しかし、この人物と、生前中から彼にまつけられたさまざまな伝説、歴史研究に与えた彼のばく大な影響を比べてみると、そのきわだった対照は興味を催さずにはおかない。

ネーミアは、歴史を記述する際に、過度に単純化することなく実態の複雑さを再現しようと試み、また、しばしば、事実だけを記述して、そこから読者が自身の結論を引き出すよう、解釈の自由を読者にまかせた。この論稿の試みは、それと同じ気持を共有するつもりである。

- (1) その好例は、次の論争を参照。
 H. C. Mansfield: "Sir Lewis Namier Considered?" *Journal of British Studies*, vol. 2 (1962) November pp. 28-55
 Robert Walcott: "Sir Lewis Namier Considered Considered?" *ibid.*, III (May, 1964) pp. 85-108
- (2) ネーミアの伝記は出版されていなく、彼の伝記的事実については、次のものを参照。
 C. S. Sims: "L. B. Namier" in *Some Modern Historians of Britain*, ed. H. Ausubel and others (1951), pp. 341-357.
 Arnold Toynbee: "Lewis Namier, Historian", *Encounter* (1961, January) pp. 39-43.
 J. L. Talmon: "The Ordeal of Sir Lewis Namier", *Commentary* (March 1962) pp. 237-46
 J. M. Price: "Party, Purpose, and Pattern" *Journal of British Studies*, vol. I (November 1961) pp. 71-93
 Isaiah Berlin: "Lewis Namier: A Personal Impression" in *A Century of Conflict 1850-1950*, ed. by Martin Gilbert, (1966). pp. 215-230

1. ネーミア革命

筆者の関心は、きわめて素朴なことから生れてきた。たまたま、一八世紀の英国政治に関する著作をいくつか読んでゆくうちに、

特に、ジョージ三世治世期に関して、多様な解釈が行われてきたことに気づいた。しかも、それは、かなり混乱した映像を生みだすほどであった。その解釈の多様性は、「一八世紀の英国政治が実際どのようなであったか」という問いに対して、「歴史家がその時代の争点をどのように定式化したか」、「どのような政治抗争の用語によって再構成したか」、また、その際、「いずれの党派の立場や偏好から解釈し説明したか」といった、歴史解釈に通常含まれる『主観的に再構成された経験』の差異によるだけではなかった。むしろ、今世紀に入ってから、歴史や歴史記述の方法に関する考え方の差異によって、以前の解釈が部分的に改訂された以上に、まったく覆がえされる地点にまで到達していたのである。『ネーミア革命』『ネーミア化』が叫ばれ、論争は、しばしば、一対の学派の対立——『ホイッグ史家』対『現代の批判家』、『通史的歴史家』対『分析的歴史家』、『ネーミア以前』対『ネーミア以後』——として扱われている。ネーミアは、まったく新しい歴史記述の方法によって、従来の一八世紀政治像を「歪曲」ないし「伝説」として一掃したといわれる。そこで、『ネーミア的方法』とは一体なんのことなのかを知ることが必要になったのである。

ネーミアは、英国史学界において学派を形成した最初の歴史家であるといわれる。しかし、ここでは、学派に通常まつわる『開

祖と弟子たち』の問題はとり上げない。ネーミアの歴史記述の方法、とりわけ、一八世紀英国の政治生活の研究としてのそれを扱うのである。もちろん、歴史家の歴史記述の方法を検討する際に、彼の多くの研究領域のうちから一つの研究領域だけをとり上げ、それに限定することには、重大な留保が必要である。偉大な歴史家の多くの場合と同様、ネーミアの貢献は多種多様の領域でなされた。⁽²⁾ネーミアの歴史家としての研究領域は、大略、四つの見出しによって区分けすることができる。この論稿で扱う「一八世紀英国の政治構造や政治的営みについての分析」の外に、「一九世紀ヨーロッパのナショナリズムに関する研究」、「第二次世界大戦の外交的背景の研究」、「ユダヤ人問題とシオニズムに関する著作」である。ネーミアの著作におけるこの幅広さと多様さは、おそらく、彼の公的務めに対する関与と学究的討究とを結びつけた、彼の人生体験そのものを反映しているに違いない。したがって、歴史家ネーミアを理解するには、「それら四つの研究がどのような主題を扱っているのか」、「それらは同じ主題についての変奏曲なのか」、「それらには同じ歴史観が見出されるか」といった問いが必要となるはずである。また、彼が観察し分析した人間悲喜劇に対する彼の態度のうちに、どのような緊張やアンヴィバレンスがあったのかという問いも必要になるであろう。しかも、ネ

ーミアが偉大な歴史家、真の名匠とすれば、それだけ、彼の仕事は、隠された精神的巡礼、境涯からの脱出を企てる苦闘としての性格を帯びたものになるからである。

しかし、ここでは、そういったネーミアの全体像を扱う余裕はない。「ネーミア革命、ネーミア的方法とは、一体なんのことをいっているのか」という問いに限定するつもりである。ネーミアが歴史家としての声望を要求しうる最大の資格は、ジョージ三世治世期の英国議会の作動に関する彼の開拓的研究にあるといわれる。また、ネーミア自身にとっても、一八世紀の英国政治生活は、彼はしばしばその研究から逸れはしたが、しかし、常にまい戻ることになった、彼の歴史研究における中心的主題であり続けたものである。したがって、筆者の限定された問いに対しては、さしあたり、彼の一八世紀英国政治に関する著作、とりわけ、彼の傑作といわれる『ジョージ三世即位期における政治構造』⁽³⁾、『アメリカ革命の時代の英国』⁽⁴⁾に頼ることにする。

以上の限定をつけた後でも、なお、もう一つの留保が必要であるように思われる。ネーミアは、『歴史』というエッセーのなかで、

「偉大な歴史家とは、偉大な芸術家や名匠と同じである。彼ら

が仕事をなし遂げた後では、他の者は、それと同じ領域で、もはや以前の術語によっては仕事をなしえなくなるに違いない」⁽⁵⁾

と述べた。ネーミアを偉大な歴史家にした『ネーミア革命』という表現は、それによって従来の歴史の方法が無効とされ、従来の一八世紀英国政治像が完全に一掃せられたという印象をあたえるのである。しかし、それは、ネーミアの仕事を一八世紀英国政治に関する結論、つまり、完成品として扱う皮相な批評家の早呑込みに違いない。ネーミアは、先きの引用に続けて、

「しかし、名匠にとつてさえ、仕事の大部分は、準備的性格をもち、主として、専門家の役に立ちうる研究に専心しているのである。刈入れの前には、耕し、種子をまかねばならない。歴史家が訓練をかさね、熟達を保持するのは、そういう研究においてなのである。より詳細なこと (less and less) により多く (more and more) を知る退屈な歴史家に対してなされるおきまりの洒落は、歴史を意味のある思考や知的目的なしに、大抵は、意味のない儀式として書いたり読んだりする人々から聞かれるのである」⁽⁶⁾

と述べているのである。

たとえば、一八世紀の英国には『政党』は存在していなかった

という彼の記述が、しばしば、誇張されてとり上げられる。しかし、ネーミア自身は、『アメリカ革命時代の英国』の末尾で、「私の次の本は、もしも書かれるとすれば、『政党の抬頭』について書かれることになる」⁽⁷⁾と結んでいるのである。彼の著作につけられている題名は、整然とした美装をこらしてはあるが、いずれも彼が書こうと望んだ完成品ではなかった。『アメリカ革命の時代の英国』では、一七六〇年から一七八三年までの通史的歴史を書くつもりであったが、その一冊を出版しただけであった⁽⁸⁾。また、チャールズ・タウンセント、いわゆる一八世紀のターニップ・タウンセントの伝記を書くつもりであったが、これも完成しなかった。もちろん、彼がなぜそれらの仕事を完成させなかったかについては、なんらかの秘密はある。ここでは、その謎はとけない。ただ、『ネーミア革命』も、すべての革命と同じように、おそらく、その初期には、もっとも手に負えそうもない仕方破壊主義的な批判力を示すのである。しかし、革命は、一夜にしては完成されないものである。また、反革命の出現によって、緩和もされるのである。したがって、ここでとり上げるネーミアの著作のそういった性格を考慮に入れれば、『革命』を全体的に評価しようとする試みは、尚早なのかもしれないのである。

この論稿では、「ネーミア的方法とはなにか」という問いを、

便宜上、いくつかの題目の下に分解して扱いたい。以下、「従来の歴史家は、一八世紀の英国政治をどのように映像化してきたのであろうか」、「いわゆるホイッグ史家と現代の批判家たちとの間の違いは、どのような点にあるのか」、「ネーミア以前とネーミア以後とを分つものは、彼の採用した方法の方法論的厳格さにあるといわれるが、彼の伝記的方法とはいかなるものであるか」、「ネーミアの出現によって、従来の一八世紀英国政治像が一変させられたといわれるが、彼は一八世紀英国政治生活に関していかなる発見をしたのか」、「ネーミアは、歴史を精神分析したとか、歴史のダウインとかいわれるが、歴史記述の対象である人間事象や制度の進化についてどのように考えていたであろうか」、「ネーミアは物語的通史を無視したと批判されるが、彼は、歴史の研究や歴史家の作業の目的や性格について、どのように考えていたであろうか」といった問いである。ただ、こういった諸点に含まれる歴史哲学的な議論に関しては、筆者は非専門家であることを断っておきたい。

- (1) J. R. Hale ed. *The Evolution of British Historiography*, Meridian Books (1964) pp. 76-79
- (2) 附の略歴と著作を参照。
- (3) *The Structure of Politics at the Accession of George III*,

second ed. (1957) 以後、引用は *Structure* とする。

- (4) *England in the Age of the American Revolution* second ed. (1961) 以後、引用は『*England*』とする。
- (5) “History” in *Avenues of History*, (1952) pp. 8-9
- (6) *op. cit.*
- (7) *ibid.* p. 418
- (8) それは、ネーミアライイトによって引きつけられた。
John Brooke: *The Chatham Administration* (1956)
- (9) Ian R. Christie: *The End of the North Ministry*, (1959)
“Charles Townshend” in *Crossroads of Power* (1962)
pp. 194-212

二、ニュークリッドの世界

ネーミアのとりあげた一七六〇年は、近代英国政治史の理解にとって、なぜ重要であったのだろうか。なぜ、『革命』という表現が使用されるほどの論議をまきおこしたのだろうか。それは、歴史家が、従来、英国史をどのような仮説で定式化し、再構成してきたかに関係するに違いない。ネーミアは、バーク以来一世紀半もの間挑戦されたことのない一八世紀解釈を變形し、一掃までしたといわれる。その結果、一八世紀の英国政治史は、ふたたび、以前と同じようには決して映像化されなくなったともいわれ

る。そこで、その当の型にはまった解説とは、どのような内容のものであろうか。この節では、従来の歴史家による一八世紀像を簡単に素描することにする。その際、『従来の歴史家』という表現は、以後、いわゆる『ホイッグ史家』をさすことにする。もちろん、『ホイッグ史家』とは総称であって、そのなかには、T・E・メイ、T・B・マコレイ、W・E・H・レッキー、W・ハント、G・M・トレベリアンといった歴史家が含まれている。彼らは、いわゆる学派を形成していたのではなく、H・バターフィールドが批判したような時代の風潮を共有していたのである。⁽¹⁾一八世紀解釈に関する限り、彼らは、約一世紀間の時差をもつ対象を扱っていたのである。歴史家は、君主存命中の治世を扱う場合、その王君に対する情感によってなんらかの影響をうける。しかし、ジョージ三世が一八二〇年に没した後は、王の性格や政治目的を自由に扱うことができる。同時に、アドルフアスのような同時代の歴史家にとつては当然であったものが、一九世紀が進行するにともなうて、その自然さが段々と忘れられてゆく。また、歴史記述の方法の上でも、『時代の過程』とか『歴史的發展の型』に対する注意の増大によって、歴史解釈に新しい要因を導入した時期でもあった。つまり、単なる表面的な物語から、個々人の行為や受難の背後に分析を進め、歴史における影響力を社会や政治の構

造的発展に帰せしめるのである。さらに、歴史解釈の発展の過程では、過去を再生させ再集する上で回顧録が重要な役割を演ずる。ジョージ三世治世期に関しては、一九世紀の半ばになって、多くの新しい証言が提出された。⁽²⁾ホイッグ史家は、その治世を映像化するために、それらの新しい証言を戦略的に使ったのである。ここで、『ホイッグ史家』という総称を使用する理由は、さらに、ネーミアならびにネーミアライトが、その用語によって従来の歴史家を扱っているからである。この点については、次節以下でふれるが、まず、『ホイッグ史家』の一八世紀像ならびに彼らの仮説を素描することにしよう。

一八世紀について書いた従来の歴史家たちは、政党制をすでにできあがった完成品として受け入れてきた。たとえば、G・M・トレベリアンは、ホイッグ・トーリーの名称、〈undertaken〉という議会操縦法、〈party line〉で争われる選挙と選挙術の存在を根拠に、ホイッグ党とトーリー党が英国革命期に確立され、それらが、彼の同時代、つまり一九世紀の自由党と保守党として連続していることを推測してきた。そして、この推定は、一つの仮説に基づいていた。

「ウィリアムとアンの治世期に互角に渡り合った二つの政党間の抗争——議会討論、パンフレット、選挙戦、談話を通じて、ホイッグとトーリーが公衆の知性に対して絶えず訴えた国論の戦いは、討論の習慣と意見の自由な表明を徐々に根づかせてきた。それらは、きたるべき時代の英国政治生活を最も特徴づけたものである。党派的な痛烈さは敵の迫害といたよくある過ちを犯すことはあったが、二大政党によって相互の唱導者に広く許容された避難所は、言論、出版の自由が英国特有の仕方でも成長することを可能ならしめたのである。」

つまり、従来の歴史家たちは、二大政党制を議会制の円滑かつ秩序ある発展のための鍵の一つだと考えたのである。そこで、彼らは、チャールズ一世と議会との内戦以来、ホイッグ党——急速な社会的、憲制的発展に賛成する党、トーリー党——緩やかな進展に賛成し、英国社会の偉大な伝統を保存することに主たる関心をもつ党、この二大政党が存在してきたことを立証しようと試みたのである。彼らによれば、英国憲政史の説明は、これら二つの政党間の抗争と妥協のうちに見出されるはずであった。

つぎに、彼らは、英国革命によって、〈personal rule of government〉が終りを告げたと推測したのである。ジョージ二世治世の末期までには、整然とした議会制ないし内閣制が確立したので

あった。その統治様式は、ハノーバー朝の即位後に存在した偶然のかつ幸運な事情に依ったのである。ジョージ一世と二世は、外国生れの不利を負い、英国政治に関心をもっていなかったため、国事の指揮は大臣たちの手中にまかされることになった。同時に王は、議会多数を統禦できる人々を大臣として選ばねばならなかった。そこで、権力は、執行委員会、つまり、党派的な線によって作られる内閣の手中に落ちたのである。しかし、実際には、議会多数はホイッグ党によって組織され、大臣たちはホイッグ党の指導者であった。トーリー党はジョージの王称に対する敵とみなされていたから、ジョージ一世と二世は、ともかく玉座を確保するには、王の権力の大部分を二三の著名なホイッグ家系の者に託さねばならなかった。これらの家系の者は、姻籍関係と排他的インフルエンスによって王権の支配から独立であるだけでなく、優越さえていたのである。ホイッグ党は、彼らの権威を身分、財産そして名誉革命の党といった輝かしい連想から引き出していた。彼らは、議会多数を確保し、トーリー党を政権から締め出すために、政治的腐敗の手段を使った。ほとんどのバラを大蔵大臣が私的に所有していたから、ホイッグ党の指導者、特に、ニューカッスル公は、ばく大な機密費を使って、投票を買収し、選挙を支配したのであった。

ここで、従来の説明は困難に陥ることになった。より厳格な教説にしたがえば、ウォールポールはホイッグ党の指導者であったから、彼の反対者はトリーであるはずであった。そして、ホイッグ内閣とトリー内閣との恒常的な交代を工夫するために、飾り立てた試みがなされねばならなかった。しかし、この説明は不能となったのである。一七一五年以来、トリー党は、ジャコバイトという汚名によって、二大政党制の筋書きに予定された役割を政界で演じなくなった。むしろ、単一政党制の発展する危険が大きくなったのである。これに対して、ホイッグ史家は、二大政党制は蔽として存在していたが、トリー党は一七四一年から一七六〇年の間に首尾よく政権を確得できなかっただけであると主張したのである。また、腐敗したホイッグ寡頭制という告発に対しても、たとえば、T・B・マコレーは、それを拒否はしなかった。むしろ、彼は、腐敗をめぐる党派的論争から解放されて、悪の根源を歴史に内在する『過程』に求めたのである。

「腐敗はティューダー王朝には不必要であった。その時期の議会が微弱であったからである。その時代よりもずっと降っては、議会手続の公開性が政治家の道義の基準を高めてきた。しかし、その中間に挿まれた王制復古後の時代には、下院はその

構成が寡頭制的であり、審議が秘密であったため、腐敗によって操縦されざるをえない状況に置かれたのであった。」

マコレーによれば、ウォールポール以来のホイッグズが腐敗によって統治したのは、その時代には、それ以外の方法による統治が不可能であったためである。腐敗や派閥が流弊する真の原因は、下院の力が王の力よりも強力になったからであった。それ故、この事態は、下院を国民の願望とより密接に適合させることによつてのみ矯正されうるはずであった。議会手続の公開性と選挙法改正法案の通過による以外には、その事態の弊風を取り除くことはできなかったのである。

しかし、ホイッグ史家にとっては、彼らの説明がつかあつた困難は、ジョージ三世の即位直後の刺激的な出来事に比べると、はるかに重大ではなかつたのである。単一政党制の危険は、むしろ、ジョージ三世の即位によつて、〈personal government〉への逆もどりに転じられたからである。

E・メイによれば、一七六〇年以前に、近代立憲主義、つまり政党と議会によつて支えられている責任ある大臣による統治がすでに確立されていた。⁽⁶⁾しかし、一七六〇年には、若年のジョージ三世は、彼の祖父と曾祖父に足かせをはめてきた体制を一掃する

ために王座についたのであった。ジョージ三世は、ポージングブルクの『愛国王』——高ぶったトーリーの教義——で幼育され、母堂とビュート卿から、王権を大臣や政党の支配から解放し、革命前に存在していた大権を復興させるよう急立てられたのであった。ジョージ三世は、彼の企てを達成させるために友人を必要とした。そして、彼は、王冠や大権に当然共鳴するはずのトーリーズのなかに、その友人たちを発見したのである。レッキーやW・ハントによれば、その際、ジョージ三世は、下院を破壊することによってではなく、下院における投票を統禦し買収することによって、王権の回復を計ったのである。⁽⁷⁾ かつては、ペンリー・ラムやニューカッスルによって掌握されてきた〈Royal influence〉が、いまや、王の道具たるビュートによって揮われることになった。ジョージ三世は、機密費からのばく大な支出によって、ホイッグ党を政権から追い出し、下院に〈King's friends〉の党⁽⁸⁾を置き、トーリー党の多数を確保することによって、彼の〈personal rule〉を確立したのである。レッキーは、一七六〇年の時期に正規の議会制がすでに確立していたとは主張しないが、ジョージ三世は、他のいかなる王君よりも、英国に深刻かつ後の世までも跡を残す傷を負わせたと告発するのである。つまり、ジョージ三世は、既存の憲法体制を破壊したために責めを負うのではなく、時

が満ちて一七六〇年の統治体制が一八六〇年の体制に向うはずであったすべての動きにがん固に逆らったからであった。

以上に素描したように、ホイッグ史家は、ジョージ三世と反対派との間の抗争を、自由と専制との間の多年にわたる戦いの一段階として、記述したのである。そして、この卑劣な専制の目論みは、ジョージ三世の強情と無能がアメリカ植民地の喪失へと導いた時にのみ、挫かれたのであった。

- (1) H. Butterfield : The Whig Interpretation of History (1931), George III, Lord North and the People 1779-80 (1949), George III and the Historians (1957).
- (2) John Adolphus : History of England (1802)
- (3) H. Butterfield : George III and the Historians (1857) pp. 97-107
- (4) G. M. Trevelyan : History of England (1926), p. 504
- (5) T. B. Macaulay : Essay on Chatham, (1898) p.68
- (6) T. E. May : The Constitutional History of England (1861).
- (7) William Edward Hartpole Lecky : A History of England in the Eighteenth Century, rev. ed (1892-9), W. Hunt : The History of England (1905).

三、神話と歪曲

一九世紀における一八世紀解釈の転換をもたらしたものは、新しい資料の公刊とならんで、一八世紀からの距離であった。同時代人の歴史家によってジョージ三世治世の歴史的説明が提供される際、その説明にあづかっていた伝統のいくつかが記憶のなかから消え失せ、それに併って観点の変化が起ったのである。一八六〇年の歴史家にとっては、ニューカッスルの党員たちを近代のホイッグ主義によって解釈することは避けえないことであった。パークの観念の影響が以前よりも明確に知覚され、明示的な引用によって証拠だてられたのである。同時に、ポーリングブルクの『愛国王』がジョージ三世の専制主義的見解に対して責任を負っているとき、彼の政綱は伝統的なトリー主義によって再構成されたのである。その結果、評価基準の変化によって、ジョージ三世治世に関する解釈の転換が起ったのであった。

ホイッグ歴史解釈がその一九世紀的性格によって特徴づけられるとすれば、二〇世紀における一八世紀解釈の発展ないし転換は、なによりも、その対象との一その時差によって、一八世紀に対する現代人の態度に起った変化によって後づけられることができる。

ホイッグ史家は、彼の同時代に支配的な観念——特に、英国国

制に関する中期ヴィクトリア的観念によって過去を読み込み、片面的に誇張された解釈を行ってきた点で批判されることになった。たとえば、一六八八年の革命の効果は、一般に誇張されすぎてきたのである。『権利章典』は、先王ジェームズ二世の不法行為を弾劾し、旧教徒を英国の王位から排除することによって大権を制限した。また、『王位継承確定法』によって、国王は、議会の支持なしに国政の円滑な運営をなしえないことになった。しかし、議會を開会することの必要不可欠性によって、王に対する議会の優越性が確立したとするのは、その結論の到達に要した以後の一世紀を一気に飛び越えることになるのである。

「一六八八年前後の歴史を研究すればするほど、通常臆測されているような断絶がむしろ欠如していることによって、深い感銘をうけるのである。……〈divided authority〉の問題に対する解決——下院の多数に対して責任を負う大臣、政権にある指導者に対して応答する組織された政党——は、はるか未来のことなのである。」⁽¹⁾

また、一七四一年から四二年の出来事についても、ホイッグ史家は片面的解釈をおこなってきたのである。ロバート・ウォールポールは、下院における反対投票の意味を憲法上の慣習によって

受け入れた近代的首相として映像化されてきた。一七四二年、はじめ、王の信任と支持を保持する大臣が、下院の反対に直面し、もはや『陛下の執務』を遂行できなくなったために、辞職をよぎなくされた。しかし、このような事態は先例のないことであり、ウォールポールはロビーでいく度も敗北しながら、なお、政権の座に執着したのである。一七四二年には、下院における一連の敗北が、慣習によって、当該政府の辞任を要求するところではなかった。ウォールポールが辞職したのは、彼の政府にとどまっていたどの大臣にも、下院の操縦の回復を望みえなかったからであった。

「本質的に個人的な抗撃は、結局、敗北を個人的に受け入れる以外になかったのである。……一七四一年から一七四二年の出来事は、たしかに、『大臣の責任』の觀念の発展にとって重要であり、下院の力が増大しつつあったことを顯著に示している。しかし、その意味は誇張されてはならない。……一八世紀が主として関っていた王権制から議會会制への移行は、漸次的過程であった。この移行に結びついてきた多くの困難の解決にとって、ウォールポールの瓦解がなした貢献は、純粹に消極的なものであったのである」。

さらに、ホイッグ史家は、立憲君主制とその前提条件たる政党

政治を、政治技能に対する英国特有の貢献として賞揚してきた。

伝統的な見解、たとえば、教科書としてしばしば使用されたG・M・トレベリアンの『ステューアートの英国』⁽³⁾によれば、一六

八八年の革命は、執行権を王による統制から政党による統制へと移行させたのであった。それによって、一六八八年以降、二大

政党間の抗争による英国支配が本式に始まり、アン女王の治世は、英国の政党にとって見習いの期間であったのである。K・フ

エイリングは、その著作『トリー党の歴史』⁽⁴⁾において、チャールス二世の治世を、あの二つの歴史じかけの党が創設された時期であつたと臆測する。この出発点から、政党史に関するほとんどの

著作は、もっぱら、「二つの政党はいつ生れたのか」という起源の問題、「二つの政党は、そのときどき、英国民を対立させた

政治的分化とどのように対応するか」という二大政党の抗争による二分法的政治観に関心を集中させてきた。そして、一九世紀の

中葉以来、政党が尊敬すべきものとなった時、大方の歴史家は、政党に神話的な系図を与えてきたのである。英国の二大政党は、

『悪政大陳情書』に基づく長期議會の採決から生まれたとする使徒承伝を与えられたのである。ホイッグ党は、チャールス二世時

代の『円頭党』『議會党』に由来し、ウォールポール、ペラムの下で腐敗し、ロッキンガム、フォックスの下では、長い間政権が

ら遠ざかっていたために純化され、一八三三年に、自由、改革、進歩の党として再出現したのである。同様、トーリー党の系図は、クラレンドンから、ボーリングブルク、ノース、小ピットを通じて、リバプール、ビール、ディズレリーへと後づけられる。

二〇世紀になって、労働党が受け入れられた時、こんどは、系図が模造され、クロムウェル時代のデイガーズやレベラーズが、英国社会主義の祖先だとされたのである。結局、従来の歴史は、英国の二大政党が、市民革命の『円頭党』と『騎士党』から由来すること、そして、今日まで、その正体の基本的変化をほとんどなせずに存続していることを認める点で一致していたのである。しかも、この見解は、その正否に掛りなく一般に受容され、政党史を色づけているため、その二つの歴史じかけの政党のいづれかを選定することなしには、政治集団を論ずることができなくなってしまうのである。⁽⁵⁾

これに対して、二大政党による二分法的発想がどの程度有効であるかについて疑義が差挟まれることになった。政治的論争が熱し、政党への忠誠が最も要請された時代——〈Exclusion〉、〈Excluded Church〉、〈Revolution of 1688〉が争点であった時期について検討したR・ウォルコットは次のように述べる。

「……統一されたホイッグ・トーリーがあったといえるだろうか。たしかに、その三つの争点に関しては、『ホイッグ』『トーリー』という立場はあった。それぞれの立場の基礎には、相対立する哲学はあった。しかし、全国的政党が、その相対立する哲学を具現化し、その結果、相対抗する立場になったという証拠は、極度に捉えどころのないものである。……一六七〇年代、八〇年代、九〇年代の政党政治が、通常の『ホイッグ』対『トーリー』に適合するという主題は、あまりに多くの要因を考慮の外においているため正しくないのである。……その見解は、〈excluded middle〉という重要な問題を避けている。主導的な議員は、重要な採決における投票記録に基づいて、『ホイッグ』『トーリー』のいづれかに区分することができるであろう。しかし、この時期の政党史をより詳しく研究すればするほど、そのような『あれかこれか』の手続きは、ますます杓子定規となる。……むしろ、この時期には、多くの議員が一貫して『ホイッグ』『トーリー』のいづれかであったわけではなかった。それ故、『あれかこれか』式の分析は助けとならないのである。……『あれかこれか』式の解釈は、その欠陥のゆえに、かえって、一連の弁解的な装置——wings, sections, factions, coalitions, a Middle Party——をつけ加え、天動説的な徴候を發展させ、それによって、二大政党の元来の観念そのものを複雑させたのである。しかし、そのような複雑化は、下院議員が『ホイッグ』『トーリー』のいづれかでなければならぬという考えに執着しないかぎり、不要なのである。」

また、一七世紀から一九世紀への直線的な発展に対しても、批判が向けられたのである。

「政党の歴史は、そのように一直線の歴史ではない。政党の名称は、その元々の持ち主から離れて、さまざまな時点で、種々の集団によって借称されてきたのである。したがって、生き残ってきたのは、政党ではなく、名称なのである。政党の発展には、英国社会で恒常的に起る階級構造の変化が反映されるし、新しい問題が政治の前面にもち上げられ、それらを解決するために、新しい党派が現われ、新しい原理や新しい人物が古い名称の背後に身をかくまうからである。」

ホイッグ史家の解釈にみられるそれらの片面性ないし誇張は、彼らの解釈の党派的性格と関連するかもしれない。ホイッグ史家は、一八世紀が関わってきた王権制から議會制への漸次的移行のいわば最後の時点に立って、その物語りを完成させる仕事、逆戻りの不能な通史を書く仕事を引き受けたのである。したがって、彼らは、過去の事象のうち現在の活動や実践に関係づけうるもののみに関心を示し、現在を説明し、正当化するために過去をみたのである。ホイッグ史家にとっては、過去の事象は、現在に同化され、適及的に『原因』『結果』によって、つまり、「現在の状態

に貢献したか否か」、「望ましい状態に対して交友的であったか敵対的であったか」によってみられたのである。『議會制の起源』『議院内閣制の起源』『大政党制の起源』といった『起源』の探索と、『発展』『進歩』といった『過程』に対する関心は、しばしば、この観点からなされたのである。しかし、当代において重要な諸特徴を過去の中に強調する必要は、恣意的な目的論的構造を過去に押しつけることになるのである。それは、一つの具体的状況が他の状況へ取り次がれた仕方を明らかにするよりは、過去についてのより抽象的な見解を誘発することになったのである。

ホイッグ史家は、歴史家に基本的な観照的態度よりも、行動の称揚、政治的志向性によって心を奮われていた。そこで、ホイッグ史家は、過去の行為について道徳的判断を行ったと批判されたのである。彼らは、極端な場合には、過去の事象のうち、自らの政治的偏好を支持するものならんども是認し、それに敵対的なものならんども告発する。この点で、たとえば、一八世紀の人々は、満足すべき代表制をもっていなかった嫌で非難されたのである。いずれにせよ、ホイッグ史家は、近代の立憲主義にあまりにひたり切っているため、一九世紀の臆説を一八世紀の世界に読み込む傾向によって『非歴史的』と批判されるのである。

しかしながら、ホイッグ史家にとっては、『過去』はまだ完全

には死んでいなかった。一八世紀を通じて抗争された国制上の争点は、すでに落着きつつあったが、その残像はなお尾をひいていた。したがって、ホイッグ史家が、当時の偏見から解放され、『実践の語法』を『歴史の語法』へ翻訳することは困難であった。むしろ、彼らは、「過去を引照して現在を説明し、正当化する必要」、「当代の道徳的基準を適用して過去を弾劾する必要」、「過去を呼び戻して教訓を学ぶ必要」を感じていた。

たとえば、D・A・ウィンスタンレイは、ホイッグ史家とはいえないだろうが、彼の名著に次のような序文を書いた。

「ジョージ三世治世のごく限られた時期におけるホイッグズと王との闘争を扱う仕事には、弁解あるいは少なくとも抗弁が必要であろう。なぜなら、過ぎし日の政党政治は、その同時代人にとってはいかに関心大なるものであっても、後世の人々にとっては、生氣と実感において幾分欠けるものがあるからである。後世の人々は、彼ら自身の時代の政治的論議にひたきっていて、ずっと以前に最終的結末をもった抗争の詳細には食傷ぎみになっているからである。大抵の人々は、ジョージ三世による王の〈personal influence〉の確立が英国史に重大な結果をもたらしたことを否定はすまい。他方、ジョージ三世が彼の目的を達成するために採用した手段、彼の目的の進展に有利ないし阻止的に働いた環境を綿密に吟味することは、多分不必要で

あり、ほとんど確実に退屈なものだと感じているのである。」⁽³⁾

ウィンスタンレイにとっては、この時期のホイッグズが以前にもまして有利な機会をもっていたにも拘らず、王が勝利を占めることになった「ホイッグズの失敗の記録」は、彼の同時代人の退屈さに抗して、人々の関心を呼ぶのに十分な主題であったのである。これに対して、現代の歴史家は、そのような必要から解放されてきた。むしろ、一八世紀の世界をより『合理的』に、つまり、一八世紀の政治の内的作動を内在的に理解しようとしたのである。

- (1) Robert Walcott: *English Politics in the Early Eighteenth Century* (1956) pp. 93-94.
- (2) John B. Owen: *The Rise of the Pelhams* (1957) pp. 1-40.
- (3) G. M. Trevelyan: *England under the Stuarts* (1904).
- (4) Keith Feiling: *History of the Tory Party 1640-1714* (1929), *The second Tory Party 1714-1832*, (1938)
- (5) 『ロンドン』は、一九二六年の『The Romanes Lecture』において、綿密な政党史の研究は、『K・フエリリングの著作とウィンスタンレイの研究以外にみるべきものがない』と述べている。『The Two-Party System in

- English Political History (1926, May 12)
- (6) Robert Walcott (1956) pp. 91-95 155-160.
- (7) John Brooke: The Chatham Administration 1766-1768 (1956) pp. 218-219.
- (8) D. A. Winstanley: Lord Chatham and the Whig Opposition (1912)

四、協役の伝記

いわゆるホイッグ史家によって描かれた一八世紀の英国政治像は、研究史に則してみるかぎり、たしかに二〇世紀に入ってから試案的に改訂されてきた。しかし『ネーミア革命』という表現が使用可能なほど、ネーミア以前と以後とを分つものは、なによりも、彼が適用した方法的方法論的厳格さにあったのである。

ネーミアは、一八世紀英国政治の研究を始めるにあたって、彼の抱負を語る序文を書いた。

「私は、アメリカ革命時期の英国政治社会をあの不可思議な小宇宙——下院に焦点を合わせて研究することにした。そして、次に、通史を書く予定であったが、そのためには、序論として、いかに多くの一般的な分析が必要であるか、また、長たらしい余談や補遺が避けられないかを知った。一八世紀の政治と現

代政治との間には、基本的な実態においてよりも、外面的形式や名称においてより多くの類似性がある。その結果、誤解が容易となってしまふ。たしかに、政党の名称や標語は一般に通用していたが、一七六〇年頃には、本来の政党組織はなかつた。名称や標語は、以来ずっと、幻想上の建物のための材料を提供してきたのである。非ユークリッド的幾何学の体系は、直線の代りに基線に対する曲線によって組み立てらる。しかし、終始一貫、その不慎れな用語によって考えることは、容易なことではない。同様、政党に基づかない議会政治は、我々にとつて非ユークリッド的体系なのである。したがって、我々の観念、さらに、思考習慣の基本的な再調整を必要とするのである。二つの体系の間の顕著な差異点を並べて記述する一般的説明は可能であつても、それらを適切に同化させることはできない。したがって、ある時代の政治用語を誤りなく使用し、確実に理解するには、その時代の政治生活に自らをひたさねばならないのである。」

ここで要請された思考習慣の転換は、歴史記述に新しい主題の道を開くことによつて可能になつた。歴史家がある特定時期に対して下す評価は、なにを歴史記述の主題とするかに大きく依存するからである。従来の政治史は、大義や大指導者によつて書かれてきた。政党は、充分に巢立った組織として受け入れられてき

た。全国的な争点に集中された世論は、時の政府の消長を決定するものと推測されてきた。これに対して、ネーミアは、次のような問いを発するのである。

「政治史が君主、大政治家、戦争といった第一級の人物や大事件を扱っている時には、歴史家は、おおむね、進歩、革新、改革といった評価を示そうと望んでいるのである。他方、これらの主役と比べて、脇役たる普通人 (ordinary men) の物語りは、たまたまふれられるだけである。それは、歴史家が英雄崇拜であるか否かにはかわりない。伝記作家は、英雄の心理にまったく排他的な関心をよせていると公言するわけでもないし、英雄をとりまく人々の重要性を否定するわけでもないが、普通人の物語りは、依然として、薄暗く、沈黙した匿名の群として残される。また、伝記の英雄は、名目上の卓越さに値いするか否かの疑いから、懐疑的、自称戯作者的、侮蔑的な仕方であられ、その卓越した人物がありふれた小者の次元まで引きおろされるとしても、なお、英雄が伝記の画像を独占しつづけるのである。同様、歴史家は、議会の指導者、大行政官については記述してきた。しかし、これらの主役が指導し、仕事を遂行する上で頼らねばならない脇役としての個々の議員や官吏は、多かれ少なかれ無視されてきた。……しかし、英国が〈political nation〉として最もよく記述されるはずだとすれば、脇役 (rank and file) の歴史がめったに試みられなかったのはなぜ

か。もしも、政治生活の実態、その共存部分を形造ってきた胴体について知ったならば、従来の歴史的評価や解釈は、一体どうなるであろうか。」

ここで、ネーミアは、伝統的なアプローチを放棄する。彼は、〈joint achievement〉としての議会から選挙区へ、指導的政治家から脇役へと向うのである。ネーミアは、『群』の生活、つまり、詠唱よりも交響曲の研究を提唱するのである。これまで英国民の政治史と呼ばれてきたものに先立って、英国の〈political nation〉の歴史を勧めるのである。その際、英国の政治社会生活のあの不可思議な小宇宙、あの途方もないクラブたる下院が、格好の題材を提供するのである。

ネーミアは、議会の伝記的歴史について、次のように述べる。

「下院の伝記的歴史は、必ずしも、従来の政治史の価値を低く見積ることにほならない。しかし、従来の関心や思考習慣を変える新たな冒険にとっては、それは、基礎作業となるのである。もちろん、議員の伝記に基づく議会史は、これまで試みられたことはあった。しかし、それらはカウンティを単位とし、時間的経過にしたがって記述されるため、政治生活の周辺だけがふれられるのである。選挙区やカウンティの範囲を越えなけ

れば、当該議員の個人的連りを適切に追跡することはできない⁽³⁾」

そこで、ネーミアによる伝記的議会史は、時点を限定し、空間的にはできるだけ拡大して、議員の生きた映像を求めめるのである。

そして、他の時点についての同種の研究との比較によってのみ、時代の動きを測定し、その変化の性格を正確に規定するのである。結局、ネーミアによって創案される議会史は、アルファベット順ではなく、夫々の時点毎に基づいて編集される議会伝記の辞典である。英国の政治史に関心をもつすべての人々にとって参照不可欠の、いわば、政治社会生活の〈who's who〉なのである。

ネーミアが議会という小宇宙をとり上げた理由は、彼が本質的に〈existential historian〉であったからかもしれない。つまり、人々がいて、彼らの関係があれば、それらが合わさって歴史の環境を作り上げるのである。もしも歴史が仮説の目録でないとすれば、歴史は詳細な事実にしっかりと基礎づけられねばならない。歴史家は、問題になっている人々に関する事実、当該時期に生きていた人々が関っていた事象に、語りかけねばならない。つまり、過去をそれ自身のタイムで、生きた実態としてみなければならぬのである。一八世紀においては、実際に問題となる人々

は、政治家であった。そして、議会において、人々は政治的に重要な決定をしたのであった。ネーミアは、一八世紀の〈political nation〉の構成について述べている。

「一七六〇年頃、英国ポリテイカル・ネーションは、大雑把に五つの集団に区分することができる。—territorial magnates, country gentry, official class, trading community, lower classes in the towns。ルーラル・デモクラシーは、実際には存在していなかった。〈yeomen-freeholders〉は、数においても重要さにおいても、衰退していた。選挙においては、〈tenantfarmers〉は投票札を彼らの地主に負っていた。一方、村落の労働者は、投票も、効果的な暴動のための手立ももっていなかった。」⁽⁴⁾

ネーミアは、ホイッグ史家による一八世紀英国政治像に代えて、一八世紀のもう一つの全景を示そうと試みたわけではなかった。彼は、従来の歴史家が扱ってきた大政治家の伝記や諸観念の歴史を第一の主題とはしなかった。同時に、イデオロギー、政党、歴史の進行に内在する一般的傾向といった、これまで一般に受け入れられてきた範疇を無視した。彼にとつては、それらの範疇は、しばしば、偏見のための仮面、怠惰なあるいは目の曇った人々の逃避所でしかなかった。そういう範疇に代えて、ネーミアは、

ジョージ三世治世期の下院の構成を途方もなく顕微鏡的な仕方
で分析するのである。「議員はどの地方から来たか」「彼らの家系的
背景はなにか」「彼らはどのような閥閥関係をもっているか」「彼
らはいかにして生計を立て、どの位いの財を所有しているか」「彼
らの受けた教育はなにか」「彼らの友人は誰か」「政治に手をそ
め、議会に入るにいたった動機はなにか」「いかなる仕方で議員
に選ばれたか」。ネーミアは、それらの問いの追求を通じて、時の
政府の消長が起った環境、党派や派閥の結晶化が行われた過程の
問題を扱うのである。つまり、一八世紀の英国における政治の日々
のやりくりについて、詳細な映像を与えようとしたのである。そ
れらの〈Practical question〉の下では、全国的争点は消失し、政
党は分解してしまうのである。議会討論や採決は、それ自体独立
して歴史の進行を決定するものではなく、むしろ、人々が感知し
ていたものを表現する錯綜した連鎖の結果であった。また、下院
は、その環境から孤立した対照実験室ではなく、ポリティカル・
ネーションの小宇宙であった。その結果、読者には、私的利益や
社会的威信を追求する者、派閥的な利益を擁護する者、公務に対
するばく然とした衝動をもつ者が残されたのである。

ネーミアは、抽象的なインパーソナルな言葉で問うことをや
め、個々人の行動に関する明確で具体的な言葉で問題を問うたの

である。そういった〈Practical question〉、日常言語による問いに
対する解答は、当然新しい型の方法を敷設することになる。ネー
ミアは、従来の歴史家による資料操作について、次のように述べ
る。

「近代英国史は、あまりに多くを伝記のなかに忍ばせたまま
にしてきた。それらの伝記は、基本的問題を捉えるまでには到
らないで、豊富な材料の宝庫である書翰、文書、日記は、多か
れ少なかれ型にはまった陳述の法衣を作るために裁断されてき
た。しかも、それらの人物の生涯を越え、かつ、彼らの仕事を
型取った憲制的発展は探究されないままにある。たとえば、内
閣制度の成長や一九世紀における政党の抬頭は、中世史に関す
る仕事と比較しうるほど、注意深く鋭い研究の題材とはなっ
てこなかった。しかし、ともかく、証拠書類の完全な出版が、分
析に先き立たねばならない。そして、この作業は、テキストが
少なく、ぼんやり薄暗いところでは、また、一般読者をあまり
刺激しないところでは、容易に企画されるのである。」⁵⁾

また、ホイッグ史家の典拠となってきたホールズ・ウォールボ
ールの回顧録や、ロムニー・セデウィックによって編集された
『ジョージ三世からビュート卿への書翰』について、彼の見解を
述べている。

「ホーレス・ウォールポールの回顧録は、一つには、政治的術策という目的から、他方、同時代人には秘密に当時の回顧を書くという目論でまとめられたものである。しかし、それに加えて、なお、虚構されている中心的な主題がある。それは、ジョージ三世、ビュート、皇太后の物語であった。それは、ウォールポールが歴史の画布の上にはり付けた彼のゴジツクの空想の一つであり、彼の想像力によって神秘化され邪悪化されたたわいもない無駄話、彼の若年時代から無意識に生まれた凶案であった……」

ジョージ三世の書翰の歴史的興味は、その書翰が最近まで事実の代用となってきた作り事に大いにあずかってきたことにある。治世時代には、ジョージ三世は、大革命によって確立された統治体制を覆そうと試みている廉で、彼の反対者たちから非難されてきた。この告発は、その後の歴史家によって、責任統治体制の転覆に対する告発へと翻訳された。この二重の歪曲によって、ジョージ三世は、ヴィクトリア女王を予期しなければならなかったその時点で、ステイユアートを見習ったのだと表象されたのである。こういった根の深いもう想を打ち壊すには、そのばかばかしさを発くだけでなく、その起源を示すことが必要なのである。⁽⁶⁾

ここで、ネーミアは、公文書の表面よりもさらに深く、私文書や日記にまで入っていったのである。つまり、個人生活の愉快な

逸話であったものが、政治事象の土台となったのである。ネーミアは、一八世紀の重要な書状を探索した時のエピソードを、

「私は館の記録保管室のなかで、手文庫につぐ手文庫を、束につぐ束を開けてみた。そして、最後には、勘定書以外になにも発見しなかった。そこで、私は、友人に、『風船で上に昇ると、地上から聞える最後の音が犬のほえ声だと聞いたことがあるが、みたところ、この勘定書が我々の旅の終りを告げている』と語上ったものだ。⁽⁷⁾」

と述べている。

ネーミアの方法は『伝記的方法』と呼ばれ、詳細図のばく大な蓄積を必要とするのである。たとえば、ネーミアは、〈Newcastle Papers〉や〈Bute Papers〉といった収集録のなかから貴重で多彩な資料を摘み出した点で、英国史学に貢献したといわれる。それらの収集録は、多くの研究者のやる気をくじくほど、山と積まれた嵩をもっており、また、実践的な目的から使用されず、日の目をみないままになっていたものであった。⁽⁸⁾ この『伝記的方法』では、丁度、はめ絵の組み立てのように、出来上りの絵が偶然によって現われるまで、断片が一つ一つ集められねばならない。たとえば、『ジョージ三世即位期の政治構造』や『アメリカ革命の

時代の英国』は、一言にしていえば、詳細な伝記の収集録なのである。しかし、その各々は、一見重要でないようにみえても、全体的理解という総和に対して貢献しているのである。

ネーミアは、この『伝記的方法』によって、脇役が重要であること、偉大な人々の行動がしばしば彼らの言葉よりも彼ら自身をよく現わしていること、また、政治家が彼らの行動を説明したり弁護したりするために与える正当化について懐疑的であるべきことを示そうとした。ネーミアが大政治家やバークやポーリングブルクといった大思想家よりも、陣笠とかニューカッスルやビュートのような第二級の人物に関心を示したのは、歴史における負けたを案じたからではなかった。紋切型の歴史上の偉人に比べ、舞台裏にいる小者の伝記には、歴史家が自らの観念を過去に投影し、それらを事実で正当化する機会が少ないからであった。ネーミアは、自らの通史的歴史を〈historical comedy〉と呼ぶのである。

「歴史小説の作家は、単に、読者が望むように過去を想像するに違いない。まじめな伝記作家は、役者と同時代人が云い違した通りに、事実の記録を批判的に検討しなければならぬ。そして、涙も笑いもなく、人々の願望が彼らの言葉の中に表現

されていると信じなければならぬ。歴史的な道化芝居は、意識された時代錯誤という安っぽい仕掛けに大方依存しなければならぬ。そのため、ぐにもつかないのである。しかし、〈historical comedy〉は、人々と環境について最も正確かつ詳細な知識や理解を必要とするであろう。なぜなら、それは、人間行動のより深いもつれや支離滅裂さを見究め承認しなければならぬからである。」⁽⁹⁾

A・J・P・テイラーは、ネーミアの歴史記述の方法を次のように要約した。

「ネーミアの『伝記的方法』とは、かつての歴史家を満足させてきた一般化を、正確な詳細図に代えることなのである。かつての歴史家が世論や国民的感情の変化をあいまいに扱ってきたところを、ネーミアは、政治の草の根にまでゆくのである。……結局、ネーミアの志は、過去についてばう大な世論調査を行うことであつたのである。」⁽¹⁰⁾

- (1) The Structure of Politics pp. X-XI
- (2) The Biography of Ordinary Men, in Crossroads of Power pp. 1-4
- (3) *ibid.* pp. 4-6
- (4) England in the Age of the American Revolution pp.

- 180-184
- (5) George IV and his Minister, in *Avenues of History*, p. 137
- (6) George III and Bute, in *Avenues of History* pp. 118-121
- (7) The Russells in Bloomsbury in *Avenues of History* pp. 115-117
- (8) Romney Sedgwick ed. *Letters from George III to Lord Bute, 1756-1766* (1939) p. VII
- (9) England, pp. 128-9
- (10) A. J. P. Taylor, "Namier the Historian," *The Observer* 1960, Aug. 28

五、非ユークリッドの世界

ネーミアは、歴史の実用的側面について次のように述べている。

「歴史は、人間が彼個人と彼の社会的境遇に内在する過去を制するのに役立つに違いない。そして、自分自身の時代がなんたるかを極度に意識することによって、現在についてより充分に理解できたと思ひ込むのである。……それゆえ、人間は、自分が置かれている環境や自分の行為の仕方について、よりわかりやすく、より包括的な理解を得ようと努めるのである。」⁽¹⁾

たしかに、歴史は、学識以上のもの、また、研究の方法以上のものである。歴史は、なかんずく、一つの理解の形式、『自己表象』あるいは『自己解釈』作業である。したがって、歴史の読者は、歴史家が新しい説明や新しい映像を与えてくれるまでは、その歴史家を高い順位に置かないかもしれない。たとえば、ネーミアを詳細図の比類なき名手と認め、偉大な政治的決定は実は多くの卑少な要求の総和としてのみ理解されうることを認め、さらには、諸々の家系や選挙区の物語りを愉快に読んだとしても、なお「結局、彼の一八世紀英国政治についての結論はなにか」と、明瞭な解答を求めらるであろう。一般読者にとっては、いかなる偉大な歴史家の作品でさえ、教科書の数十行にせじ詰められねばならないのである。

しかし、ネーミアの試みは、そのような教科書を書くことではなかった。ネーミアの出現以来、一八世紀英国政治についてのホイッグ的説明は最終的にくつがえされることになったが、それと同じ位明快な歴史的合成に代えられているわけではない。一八世紀に関するネーミアの著作——『ジョージ三世即位期の政治構造』と『アメリカ革命時代の英国』——は、一連の試論からなっているのである。それらの試論は、相互に関係づけられてはいるが、各々、多くの資料に基づいて、それ自体で仕上げられている

のである。したがって、ここでは、過度の包括的理解という重荷を負って、ネーミアの全般的な一八世紀政治像を求めめる代りに、ネーミアは一八世紀の英国政治に関していかなる発見をしたかと問うた方がよいのである。もちろん、ネーミアは、単に、新しい知識を彙大に集めただけではなく、それらを厳密に分析したのである。彼は、個々人の行動によって制度の進化過程の研究にアプローチし、その個人の詳細図を制度的事象の進行に関係づけて理解する洞察力をもっていた。原資料から注意深く収集され、精密に分析された詳細図から、ネーミアが引き出した結論は、比類なき視野と構想力によって透視されたものであった。A・トインビーが述べたように、ネーミアを偉大な歴史家にしたものは、折り紙じきの〈capacity for taking infinite pains〉と〈Brilliant gift of intuition〉⁽²⁾という、二つの資質の結びつきにあったのである。

ここで、ネーミアの作品の形式について少しふれておきたいと思う。これは、どの批評家も「ネーミアという偉大な人物について最も奇妙なこと」として指摘する点であるが、ネーミアは顕微鏡と望遠鏡を同じ位に有効に使って、シャム双生子を思わせる二つの面をもった作品を作り出したのである。大著では、彼は、日々の政治的営み、一見つまらない事件にみえるものを恐ろしく詳

細に解剖してみせたのである。それらは、銜学趣味といわれる地点まで細かく、緻密で、しかも完結してはいなかったのである。他方の極は、当惑させられるほど短かい歴史的試論集からなっている。たとえば、『The King and his Minister, The Cabinet, The Prime Minister』、『Monarchy and the Party System』などは、ほとんど一世紀にわたる歴史過程を一目に見渡す解答集のようなものであり、『Nationality and Liberty』は、ヨーロッパ大陸をたつた一つの講演のなかにつめ込んでいるのである。もちろん、それらが講演であったというにはあるに違いない。しかし、彼は、中位の長さで持続する通史を作り出すことはなかったのである。この点で、「彼の仕事には、動きが欠けている」という批判を受けることにもなったのである。

ネーミアの作品におけるこの両極性は、彼が当時の歴史家のうちで最も〈engaged historian〉であったこと、他方、詳細な歴史研究に専心したという、彼の人生活動の両極性を反映しているかもしれない。また、ネーミアという人間そのものの両極性を反映しているかもしれない。彼は、ヨーロッパの二つの両極、英国とロシアを愛し、その中間にあるすべてを嫌ったのである。政治的には、彼は、伝統と共に革命を愛し、強情なトーリーと共に革命家の魅惑を理解し、チャーチルと共にトロツキーに共鳴すること

ができたのである。彼にとって好みにあわなかったのは、いわゆるリベラル、原理はもっているがそれに完全に従って行動はしない徒、中途の処にとどまる改革家であった。ネーミアは、自らを「プロ・ロシア、反ドイツ。そして、天性、偏好、懐疑からの保守主義であって、物的利害関心ないし恐怖からの保守主義ではない。結局、〈a Tory Radical〉なのである」と規定したのであった。

それでは、ネーミアは一八世紀の英国政治生活についてのどのような発見をしたであろうか。ネーミアの作品紹介がこの論稿の目的ではないから、簡単にふれるだけにしたい。便宜上、ホイッグ史家の解釈との対比において、二つのことにふれたい。

ハノーバー朝の政治について、ネーミアの偉大な発見の一つは、その時期の政治が、ともかく、現代的な意味において『政治的』ではなかったということである。以前の歴史家がホイッグとトーリーとの間の高ぶった論争によって記述したところを、ネーミアは、実際の抗争は諸々のインタレストや集まりの間の抗争であったことを示した。『東インド会社』や『ベッドフォード一味』の方が、名譽革命の諸原理よりもはるかに重要であった。いわゆる『トーリーズ』とは、カウントリー・ジェントルマンであって、

ジャコバイトではなかった。つまり、一八世紀においては、政治問題に対してある立場をとるために議会に入る議員は、ほとんどいなかったのである。

「人々は、なぜ議会に入ったのだろうか。ジョージ三世治世の初期に限らず、数世紀の間、野望いなく若者の夢は変わってこなかった。この夢は下院に向けられ、人々は『一廉の人物』になるために議会に入った。彼らの夢の内容は、彼らの地位、職業、年令、気質、環境によって異なっていたが、下院に議席を占めることは、究極的な目標ではなく、より奥底の目的に対する手段という点で共通していた。まことに、議会は、人間という蟻がさまざまな道を通じ、長い列をなして向う蟻塚であった。」

まず、〈inevitable or predestined parliamentary men〉として記述されるような型があった。その一つは、政治的に活動的な貴族の子弟たちで、彼らは年令に達すれば、ほとんど下院に入った。彼らにとっては、名前の後につく M. P. は、貴族名鑑にのる準備のための議会慣例上の敬称であった。もう一つは、バラを所有するか統禦するかしているカウントリー・ジェントルマンであった。彼らにとっても、議会は究極的目標のための手段ではなかった。問題は、彼らのカウンティイやバラを代表することによって、地方社会における彼らの首位性が立証されることであった。したがって、これらの〈inevitable parliamentary men〉は、なにか明白な企みをもって議会に入

るということはなかった。しかし、ひと度政府部内に入るか、政府側に立つかする時には、あたかも目的をもって入ったかのようになり、なんらかの仕方自分で役に立つ人間であることを立証しなければならなかった。……一七六一年頃には、議會を活気づける党派間のゲームは演じられていなかったし、また、人々はただの酔狂のために政界に入ることなかったもので、なにか別の理屈に合う目的が必要であったからである。そのため、もしも議會会期がいくつか続いた後、議會に対して示すべきものがなにもなかった時には、彼らは、『顧慮に値しない人物』と結論される。そのような義務から解放されていた人々のみが、ジョージ二世の治世には、『Tories or Country gentlemen』、ジョージ三世の治世には、『Opposition, Country gentlemen』であった。……このカウントリー・ジェントルマンのきわだった特徴は、政治的な手腕や経験、議會演説ではなく、官職に対する無関心、生活における独立性であった。さらに、当然のことながら、彼らの政界への参与は、官職者や職業的政治家に比べて、はるかに不定期的なものであった。

次に、行為の動機として、官職や権力の夢をもつ人々、『Treasury Bench』とか『Marshal's Stick』とか呼ばれる人々がいた。一八世紀の英国においてさえ、国家機構の中で最も高い地位を達成しようという夢は、『Political nation』として記述されるもののどの成員によっても抱くことができた。もちろん、爵位保持者は、議席や官職の獲得において利点をもっていたが、出発点における差は、他の者が優れた能力や業績によつ

て不利を克服できないほど、問題ではなかった。実際には、人格、演説能力、討論で勝つ力、権威が重要であった。ウィッツはきわめて稀なことであったし、総選挙が会期のなりゆきを決めることもなかったからである。……この点で、一八世紀においては、比較的卑しい身分からの出世は、党派の選択において慎重で、かつ、志願において根気強いといった平均的能力しかもっていない人々にとつてさえ可能であった。議會は、一つのチームとしてみた場合、それを構成している個々の議員よりも優れた『Joint personality』をもっていたし、その目的が個々の議員を凌駕していれば、個々の議員について顧みる必要はなかったのである。

さらに、社会的な出世を求める人々『Coronets』にとっては、議會に入ることは、いうまでもない誘因であった。統治集団の一員であることは、当然、その人の名を挙げるし、そうでなければ閉ざされていた門戸を彼に開くからである。……この点で、一八世紀においては、下院は上院への便利なふみ台とみなされていたのである。

その他には、私的あるいは金銭的な利益を求める人々、『Privy Councillors, Purveyors of Favours』、職業上の昇進を望む人々、『Soldiers, Sailors, Civil Servants, Lawyers』がいた。その金銭的利益は、ある場合には、官職、閑職、年金、また、ある場合には『Government contract』を確保することであった。実際、政府が議員から利益を得る以上に、議員が政府から得る利得の方が多かったのである。……一八世紀の英国は、人々の良心を動か

し、絞首台や戦場に生命をかけるような大義をめぐって議会抗争が行われた時期ではなかった。国民がすべての基本的な点で一致しているような時期には、議会抗争はその実質を失い、不可避的に、官職をめぐるすさまじい競争へと変化する。そのような場合でも、政党組織によって統制されている議会では、その権力闘争は、相互の忠誠、相争うチームの呼びおこす狂喜と侮惜によって飾られ、大仕掛な取り引きといった謹厳な様式を装うのである。しかし、一八世紀には、議会取り引きは、個人的に、あるいは、小さな集まりを通じてなされた。それゆえ、孤独な酒のように、けちけちしていたのである。……」

また、ある特定の争点をめぐって総選挙が行われるという考え、選挙民の政治教育のために選挙が争われるべきだという考えは、一八世紀には無縁であったのである。

「従来、カウンティーの選挙では、〈ministerial and aristocratic influence〉が誇張されてきたが、これは事実であろうか。たしかに、いくつかのカウンティー選挙では、〈commercial influence〉、〈metropolitan influence〉、〈Government influence〉が働いていたが、それらは無視しうる量であった。かりに、政府が干渉するとしても、彼らは、主として、大地主を通じて働きかけねばならなかった。したがって、カウンティーにおける候補者にとってのきまり文句は、〈Gentlemen, Clergy, and

Freeholders〉に投票とインタレストを求めたことであった。その際、〈interest〉とは、依存者に対して効めをあらわすことができる〈influence〉を意味していた。……投票を確保するため手段を隠したり、偽装したりする企ては、ほとんど必要がなかった。かくして、社会的諸力の合成は、〈action stunts〉に頼ることなしに達成されたのである。借地人が地主や管理人から指図されて投票するであろうことは当然であり、その際採用される手段もごくありふれていたから、格別名指されることはほとんどなかったのである。

バラ選挙の場合には、従来、議会改革運動の刷物から、「制限された選挙権、不平等な配分が政治的腐敗の主要原因である」といった軽率な一般化が引き出されてきた。しかし、それは、あまりに大雑把な概括であろう。……たとえば、バーヂェス・バラは、ボケット・バラになる傾向はある。しかし、〈narrow corporation〉は、望んで譲渡したり買却したりする政府の工作のために、好都合な場を提供したのである。また〈largest electorates〉でさえ、買収といった政治的腐敗を阻みはしなかった。そこでは、地方的な寡頭制に対する実質的な報酬や取るに足らない官職の提供に代って、供应や金銭のばらまきがあったのである。このように、選挙権も、選挙民の規模も、選挙区の性格についての絶対的に信頼のおける指標とはならないのである。

また、もう一つの一般化として、〈big popular constituencies〉は、ロットン・バラとは区別して扱われるべきだといわれ

る。異なった型の人は、異なった型の選挙区によって引きつけられるといわれる。それは、確かである。しかし、パラーのすべてが腐敗し閉じた型のもでなかったとしたら、究極的な結果は基本的に違っていたであろうか。むしろ、悪の根元は、相続され定められた選挙権にあったのではなく、その時代の精神的風土や当時の慣行のなかにあったのではないだろうか。恐らく、人々がその制度にがまんしていたのは、当時、〈opulous cities〉と〈rotten boroughs〉との間で、その二つから選出される議員の間に、見解や道義の上で大きな違いはなかったからであろう。

一八世紀の政治は、〈Proprietary type of politics〉であった。二〇世紀の政党政治、コーカス、選挙術が『常態』であって、他のいかなる制度も奇異で異常であると臆測する人々にとつては、一八世紀の政治は異様にみえるかもしれない。しかし、実際には、それらすべてが単純な事実、つまり、議会選挙の目的が選挙民の政治的道義的教育ではなく、議席の獲得であるということに基づいていたのである。⁽⁶⁾

ネーミアは、議員の動機や選挙制度を扱いかぎりでは、政党名を使用することなしに、当時の政治生活を描くのである。それは、二つの伝統的な政党名の性質、真の意味はいかなるものであったのだろうか。ネーミアは、いくつかの典型的な選挙区を選んだので、その選挙区における日々の政治的営みを詳細に分析するので

ある。⁽⁷⁾

その一つは、シュロップシャーで、『ホイッグ・カウンティ』のモデルとみなされていたものである。そこは、ガバメント・インフルエンスやアリストラシーの支配から独立し、当時、英国北西のトリー・ベルトに位置していたが、通常、少くとも八人のホイッグズからなる堅固な核を選出していたのである。〈Shropshire whigs〉は、英国の他の州にはみられない堅固さをもっていて、一つのまとまりとして扱われていた。ニューカッスルは、ポイス伯を通じて、その一個師団を培養してきたのである。しかし、そのうち幾人かは、ニューカッスルが辞職してまもなく、宮廷派へ投じたのであった。彼らにとつて、ホイッグの大義は、たかだか利得を獲得するための歩であったのである。また、ジョージ二世治世下で〈Tory Opposition〉であった人々も、ジョージ三世治世下の〈Whig Opposition〉のなかに見出されたのである。つまり、一七六〇年頃には、カウンタリーの独立性は、トリー・ホイッグの政党ラベルとほとんど関係がなかったのである。

シュロップシャーとの対照に選ばれたのは、コーニッシュ・パラーであった。ここから選出される議員は、ガバメントとより密接に結びついていた。しかし、その当時には、他のカウンティ

におけると同様、カウンティの『トリー』議員と、バラの『ホイッグ』マグネットとの間には、相互自制に関して暗黙の了解があった。そして、ここでも、政治はすぐれて人的であった。たとえば、一七六一年の選挙の時、Pennyのバラにおいては、『トリー』を支援していると推測されていたジョージ三世とピ

ニートは、かつての指導的ホイッグでバラ・パトロンであったファルマウス卿から議席を提供され、その議席にホイッグを指名したのであった。他方、指導的なトリーのフランシス・ベセツトは、すべてのトリーズを歓喜させたと推測されているジョージ三世の即位には気づかを示さず、ファルマウス・インタレストに対する抗争をつづけたのであった。つまり、ほとんどの選挙区では、地方的な争点に優勢であって、その戦いは全国的規模では争われなかったのである。

以前の歴史家は、一八世紀の政治を、二大政党制のパターンに適合させようと試みた。そして、それをホイッグとトリーとの間の闘争として描こうとした。したがって、もしも政権にあったホイッグがジョージ二世を抑制したとすれば、当然、ジョージ三世が幼育期に吹込まれた反対の原理は、トリー原理であった。ジョージ三世は、即位後、ホイッグを締め出し、彼らをトリー

ズによって代えようと試みたのである。この従来の見解に対して、ネーミアは、一七六一年の総選挙で選ばれた議員の議会活動を詳細に分析して、次のように述べるのである。

「ホイッグ・メンタリティーやトリー・メンタリティーはあった。その各々は、国家と教会のようないくつかの概念に表現され、それ自身のイデオロギーと理想主義をもち、情緒的な訴えや伝統的な標語に込められていた。しかし、実際政治において、トリー・メンタリティーには、はなはだしく異なる二つの解釈の余地がありえた。そして、今日まで、トリーとラディカルとの間には姻せき関係があった。両者に共通な気質は、いずれの主義によっても満されえが、ホイッグの常識的な要領をえない妥協に対しては反対であった。ホイッグ・メンタリティーもまた、環境によって変るが、しかし、その実質を変えることなく、ある時には保守主義的性格、ある時には改革的性格を装うことができた。明確に規定された争点が欠如している時には、これらの型は、すべての有機体と同じように、直線的な思考を生むことはなく、明確な分化を作り出さないものである。さらに、政治には、常に、人的関係という攪乱要因が存在しているのである。したがって、ゲームは、諸々の集まりによって演じられ、人的関係は、常に、社会的・政治的の同盟の論理を交差し混淆させるのである。」⁽⁸⁾

ネーミアによれば、一八世紀の議会には、政党組織はなく、また、適切な政党規律もなかった。つまり、かなり実質的な独立性があったのである。それでは、なぜ、従来の歴史家は二大政党制を仮定してきたのであろうか。官職をめぐる議会抗争は、必然的に『賛成』と『反対』、『与党』と『野党』、『Government Party』と『Opposition party』の二分法を作り出し、二つの政党名は一七世紀の第四四半期以来流通していたために、適及的に、二大政党制の外観が臆測されたのである。しかし、実際には、政党にはなく型に基づき、三つの広い分化が一八世紀の下院に存在していた。一方の側には、『Court』や『Administration』の追従者たち〔placement〕、永久に『与党』である集まりが、他方の側には、独立したカウントリー・ジェントルメン、自ら選択して永久に『在野』である集まりが、そして、その中間領域に、権力闘争を行う政治的派閥が存在していたのである。しかし、この一八世紀議会政治の構造、議員の政治行動に関して、『ホイッグ』『トリー』の政党名は確実な手引きとはならなかったのである。また、『ホイッグ』についても、トリーについても、一八世紀から一九世紀への連続性、それぞれの内的凝集性を証明することはできなかったのである。つまり、伝統的な政党命名による歴史は、名称と実態との混同、同じ名称の下での異なった実態間の混同の危険か

ら免れえなかったのである。

ネーミアのもう一つの偉大な発見は、『体制の変化』の神話とでもいえるものに関するものである。政治史においては、人々が実際にやっている事柄、つまり、政治行動が重要な主題となる。同時に、その人々が自らの行動をいかにみているかといった、その自己解釈も歴史記述の部分を構成する。そこで、従来、ジョージ三世治世の初期については、いかなる党派の立場の解釈を採ろうとも、みな一様に『体制の変化』とみなされていたものをめぐって論争がなされてきた。しかし、今日の歴史家の目からみれば、距離の測定が可能なほど、具体的変化が実際に起ったのかどうか疑問なのである。一九世紀の歴史家は、一八世紀人の云伝えにもっぱら依拠し、各党派が主張する『体制の変化』の仮説を当然の前提としてきた。そして、一七六〇年前後の政治のからくりについての顕微鏡的知識を欠いていたため、『変化の功罪』の診断のみをこととしてきたのである。もちろん、新秩序の宣布が具体的変化と対応せず、純粹に觀念上の変化であっても、重要な政治的反響を導き、具体的変化と同等の意味をもちうる場合がある。しかし、今日の歴史家は、『新秩序』を正当化するか否かの必要から解放されていたから、むしろ、具体的変化が実際に起ったの

かどうか、『体制の変化』は神話ではないのかの疑問を提出するのである。

問題の『体制の変化』は三つの面について述べることができるが、その一は権力の社会的基盤における『変化』に関するものである。ジョージ三世即位期、英国政治の基本構造——政治権力の社会的基盤に重大な変化が起ったであろうか。従来の見解は、一七六一年の総選挙、それによって選出された下院の構造に関する臆測を通じ、ジョージ三世の即位とともに「新しいものの秩序が生まれる」と主張したのである。ホールズ・ウォールボールの手紙を証拠として、「一七六一年の総選挙では、通常よりも腐敗し、新議員が通常よりも多く選出され、彼らは以前に議会経験も政党関係ももっていなかったため、議会における王の取り巻きになる運命をもっていた」と推測されてきたのである。そこで、ネーミアは、「新議員の数」「選挙腐敗」「新議員の階級や党派関係」をそれぞれ綿密に検討した結果、

「先きのウォールボールの陳述を引用し、意識してきた歴史家は、いずれも、その正確さを確かめる努力をしなかったのである。それをよく吟味してみれば、彼の陳述は、歴史の法廷で証拠として役立つ供述書ではなく、単なる思いつきの言葉、あ

るいは、伝説なのである」⁽¹⁶⁾と結論するのである。

『体制の変化』の第二の側面は、憲制上の『変化』に関するものである。これは、ハノーバー朝初期の『ホイッグ優勢』とジョージ三世治世初期の出来事をどのようにみるかに依存する。従来歴史家のなかでは、一方の側は、ホイッグ優勢を思わしくない事態として扱い、他方、ホイッグ史家は、それを確立された立憲制として扱ってきたのである。またジョージ三世即位期に起った憲法上の抗争や争点に関して、一方の側は「王が確立された範囲をこえて彼の権威を拡大しようとしたのだ」と主張し、他方は「寡頭連合は王を隷属化するために形成されていたのだ」と反論してきた。しかし、ネーミアによれば、一方の側の『大権』という告発も、他方の側の『アリストクラティック・ファクション』という告発も、明確な憲法上の用語によっては定式化されず、空白が残ったのである。そこから、「ジョージ三世治世の初期に、王権の性格や範囲に関して基本的な考え方の差異があったのかどうか、むしろ、論争は当時の政治状況に内在する不釣等な配置関係からの論理的帰結であって、それが偶々、個人的要因と偶発的環境によって増幅されたのではないか」という疑問が生まれたのである。

従来の見解では、ジョージ一世、二世治世とジョージ三世治世とが対比させられてきた。ハノーバー朝の最初の二君の下で、内閣政治の形式、原理さえが確立されていた。政府は下院における多数党に基づき、王はその多数党の指導者ないし造り主を受け入れねばならず、また彼らを通じて行動しなければならなかった。

そして、この『進んだ』憲政時代に対してジョージ三世治世の初期が提出した対照は、通常、ジョージ三世の個人的な性格、彼がレスター・ハウスで吹き込まれたといわれる原理に帰せられたのである。しかし、こういった見せかけの発展は、実際には、状況の論理的帰結であったのである。

ネーミアは、二つの事例をとり上げる。それは、一七四四年から四六年の事例——ジョージ二世の寵愛を受けた大臣と考えられていたグレンビル伯が辞職をよぎなくされ、ペラムが召還された事例、つまり、ジョージ二世は、下院で多数党の支持を統制できる大臣を受け入れねばならなかった立憲君主として映像化されてきた——と、一七六〇年のジョージ三世の事例——ボーリングブルクの『愛国王』でトリー教義を教え込まれ、即位によって王権を大臣や政党の支配から解釈し、名譽革命以前に存在したような王権の回復を意図していたと考えられてきた事例——である。

「責任議会制の教義のようにみえるものを説いていた人々でさえ、王と結びつかない政党政治、したがって、立憲的議会反対党の観念はもっていなかった。なぜなら、王は、彼らにとって統治の実質的要因であり、単なる表看板ないし抽象的観念ではなかったからである。……また、これらの人々は、みな一様に、〈formed opposition〉を忌みきらっていた。……一七四六年の出来事は、一見、近代の慣行と類似しているかもしれない。……しかし、そのような以前の形式への転回は、体制の基本的変化にはならなかったのである。そして、ニューカッスルやヘッドウィックは、一七八〇年のホイッグ・オポジションの精神的先祖ではなく、ノース伯の直接の先祖であった……」

ジョージ三世の即位は、それ自体、なんらの新しい観念の到来を記さなかった。また、ピュート伯という騒がしいが無能な人物を除いて、直ちに新しい大臣たちを生むということもなかった。……一七六〇年の状況の特徴は次のようなものであった。大臣たちの『同盟』に対して数多くの抗撃はあったが、政策の批判はほとんど起らなかった。むしろ、不平の種は、引き続き、パトロネージの独占に対して提出されていたのである。このパトロネージこそは、政治のためにはなく政治によって生きる群にとって、主要な利益の当りのものであった。……実際、ジョージ三世の憲制上の慣行は、ジョージ一世、二世のそれとほとんど違わなかったのである。⁽¹¹⁾」

結局、ネーミアのホイッグ史家に対する批判は、次の点にある。

たのである。

「ホイッグ史家は、政党制の体制を一八世紀の偉大な業績として祝福しているが、その一八世紀の体制が王に負わざざるをえなかった矛盾にみちた地位に充分注意を払っていない。……その当時の抗争は、憲制そのものをめぐって起ったようにみえるが、実際には、当時の憲制機構に必然的な調整不良の結果として記述されるべきなのである。一八世紀の憲制体制、つまり〈mixed government〉に内在的な矛盾とは、一方で王が執行部の長であること、他方で、政権をめぐる議会闘争、大臣が議会に対して責任を負わねばならなかったこと、この二つを調和しがたく結びつけていた政治体の解決不可能な矛盾のことである。しかも、この二つは、〈royal government〉から〈parliamentary government〉への編成変えの時期には共存しなければならなかったのである。」

『体制の変化』をめぐる議論の第三の側面は、『変化』診断に關するものである。すでに、同時代人によって、一八世紀前半の「ホイッグ優位の体制」と中期のジョージ三世体制とが対比され、それぞれの政治的偏好から両体制についてそれぞれの評価が与えられてきた。一方の側は、「ジョージ二世は腐敗したホイッグ寡頭制によって拘束されていた」と述べることによってジョージ三

世の新体制を弁証し、他方の側は、「ジョージ三世こそ腐敗の大周施屋である」と主張することによって新体制を弾劾してきたのである。その際、いずれの側も、権力手段として機密費の効めに言及してきたのである。

ネーミアは、機密費についての歴史的伝説がいかにして生まれるかといった事例をいくつか上げながら、議会腐敗の手段としての機密費について、「その目的のために利用可能であった額ほどの位いであつたか」「当時、王によって支払われる年金は、誰に支払われ、実際どのような性格のものであつたか」の諸点について吟味するのである。その吟味の結果、従来『機密費』にまつけられていた謎は、多くの金が大蔵大臣から引き出されたという事実にあつたが、伝説は、当時の歳出の細目を混同していたのである。議会腐敗のためには、大蔵大臣に支払われる金以外の機密費は残されていないし、しかも、その額は一般に誇張されているほど多額ではなかつたのである。また、選挙における機密費の重要性、間接的な補助金の方式は、否定できないが、その代価は算定不可能であつた。つまり、〈bribe〉に支払われた俸給のどの位いが、なされた仕事に対する報酬であるか、どの位いが政治的褒賞であつたかを算定することはほとんど不可能であつた。同様、議員に支払われる年金は、一八世紀型の議員歳費に対す

る僅かの追加にすぎなかったのである。しかし、それについての伝説は、一八世紀のそういった方式をその時代に疎遠な基準で判断していたのである。一八世紀の理論にしたがえば、国家の業務を遂行しなければならぬ執行部は、王と彼の大臣からなっていた。立法部の仕事は、王を助言し、彼の官吏を監査することであった。律義な議員本来の態度は、その仕事の履行において政府を支持することであった。〈formed opposition〉のためには、ジャコバイティズムのように現王朝に対して不忠誠であるか、より上位の官職を求める政治家の利己的、派閥的な陰謀以外に理由はなかったのである。しかし、議員にとって政府と協働することが本来であったとしても、国事への参動は償われるに値する仕事であったし、議席を確保するための避けられない失費は系統的な考慮に値したのである。一八世紀には、現代的な意味の政党組織は存在せず、陛下の政府と国家そのものが、理論的には、すべての好意ある議員を包含する党であった。したがって、個々の大臣の交代にも拘らず陛下の政府を支持することは、必ずしも、党派を変えることを意味しなかった。また、陛下の政府から報酬を受けとることは、買収されることと同義ではなかった。一八世紀の政府は、党機構や党支持の選挙民によって個々の議員を統制することができなかつたから、叙勲、官職、年金、契約によって政府の支

持者たちを固めねばならなかつたのである。

しかし、政府の下に雇用されることによって、どの位いの数の下院議員が熱誠を表わしたかを見積ることは難しいのである。機密費による年金は、財政的に差し迫った窮状にあるものを除いて、下院議員に関しては不評であり、ほとんどの場合、より望ましいなにかを待つ一時的な布置であった。また、受納者のほとんどが、そうでなければ反対派に降下する議員ではなかつた。上院議員の場合には、機密費による年金の受納者は、借地人を通じてカウンティ選挙を操縦できる地所もちの貴族でもなければ、上院から下院を固めるロットン・バラの所有者でもなかつた。大抵の場合、受納者は、地所がなく爵位だけを相続した人々と、バラを所有していない人々であった。つまり、失業手当や老令年金で生活する貴族とでも記述されうるような人々であったのである。下院議員の場合には、ほとんどの場合、年金の受納者が議会から退出したり、再選に失敗した後でも続けて支払われる追加的俸給といったものであったのである。一八世紀の英国には、〈state pauper〉の理論と同じ原理がなお流勢していたから、機密費による年金は、性質において政治的ではなく、慈善的なものであつたのである。

結局、一八世紀英国の機密費に関する歴史的伝説も、機密費一

般にまでいく伝説と変らなかつたのである。

「あらゆる『機密費』には、伝説がつきものである。その名称そのものが、恐れとか疑いとかを起させ、人々の想像をかき立てるのである。しかし、実際には、政治的機密費についての最もありふれた特徴は、いつでも、それについてまわるばかりか、⁽²⁾くにもならない金の労費なのである。」

- (1) "History" in *Avenues of History*, p. 1
- (2) A. Toynbee, op. cit.
- (3) A. J. P. Taylor op. cit. "Prophet and Pedant", *The New Statesman and Nation*, June 25, 1955

- (4) *Conflict* (1942) p. 94
- (5) *Structure*, pp. 1-61
- (6) *ibid.* pp. 62-157
- (7) *ibid.* pp. 234-425
- (8) *England* p. 184
- (9) *ibid.* pp. 171-224,

Monarchy and the Party System, in *Crossroads of Power*, pp. 213-324

- (10) *Structure*, pp. 158-172
- (11) *England*, pp. 45-119

- (12) "The King and his Ministers", in *Crossroads Power*, p. 90
- (13) *Structure* p. 176-7

六、歴史的デタッチメント

ネーミアは、議会議挙の詳細図や、ニューカッスルやビュートのような通常は第二級の政治家とみなされてきた人々の活動にも、ばら注意を集中し、彼の顕微鏡的分析によって、錯綜複雑な実態を歴史的に再構成した。しかし、そのために、彼の『伝記的方法』は、彼が選択した一八世紀英国政治という対象の性格に拘束されているのではないかと、疑問が起るかもしれない。つまり、ネーミアは地方的あるいは人的関係によって英国政治を解釈したが、それらの「Influences」は、言葉の通常の意味で、政治的関心が低く、政治問題が重大でない時と所で最も強くなるであろうという疑問である。しかし、ピアーズ教授が『ジョージ三世と政治家たち』の中で述べているように、「この時代は、完全に政治的冬眠期であったわけではない」⁽¹⁾のである。また、ネーミアの批判者であるインターフィールドも、「一七六〇年の英国は、『構造分析的歴史記述』が他の型の歴史記述にとって代えられねばならない」という意味で、ユニークであったと想像することはできな

(2)と述べている。したがって、ネーミアの方法が、ある特定のエピソードに適用された場合の結果を越えて、はるかに重要であるか否かの問いに対しては、政治史の記述対象である人間の政治行動、制度の進化過程についてどのように考えていたかを検討した方が有効であろう。

ネーミアは、『伝記的方法』によって、ジョージ三世治世の初期における『ホイッグズ』『トーリーズ』『インデペンデント』が誰れであったか、それらの政党命名の意味や性格はなんであったかを見出そうとした。彼の顕微鏡的分析の下では、ホイッグ史家がかつて愛用した二大政党制の説明は姿を消し、政党命名の背後に諸々の派閥や利益が残された。彼は、それによって、一七六〇年にホイッグ党について語ることがいかに不可能であるかを示した。政策についての重要な決定は、個人的な野望や派閥的忠誠にしたがって、しばしば、偶然に決定されていた。つまり、従来の通史的政治史は消却する傾向にあったが、彼の『伝記的方法』は、政治行動における動機の複雑性をあらわにしたのである。

ネーミアのこういった歴史記述の方法に対してなされる批判にほとんど共通する論点の一つは、彼が歴史における観念や原理の役割を過度に蔑視ないし無視したという点にある。³⁾直接の実態は、諸々の事象の錯綜体であるかもしれないが、決定それ自身は、政

治の論理的な分法性を作り出すのではないか」「パークやポーリングブルクの政治的教義は、それを採用する人々の動機に拘りなく、妥当性をもつのではないか」「活動的な政治家でさえ、観念や政治綱領によって人々が影響されることを承知している。そのため、彼らは、彼らの権力欲を、政治的教義という体裁のよい仮装によって装わざるをえないのではないか」「一七六〇年には、人々は確かに後の時代の綱領といったものを欠いていた。しかし、諸々の原理はもちえたのではないか。そして、原理の存在しない政治構造は機能しないのではないか。そういった政治構造は、必然的に骨と化してしまっているのではないか」といった、さまざまな問いがネーミアに向けられたのである。つまり、綿密な伝記的研究は、必然的に、人間行動のさまざまな動機をあらわにするが、政治行動の複合性を過度に単純化し、一側面だけを強調することもありうるという批判である。

たしかに、いわゆる政治哲学者とか、政治思想家にとつては、パークやポーリングブルクの著作は、政治的観念の発展を後づけたり、時代思潮を構成して見る場合には重要である。しかし、ネーミアにとつては、観察可能な現象、つまり、諸個人の政治行動に焦点を合わせて、日々の政治的営みを分析し記述することに關心をもっていたから、彼にとつて重要なのは、そのような

著作の背後にある政治的動機であったのである。この観点からすると、一八世紀における政治的小冊子の多くは、偽善的な『標語』であったのである。そして、そう呼んだために、ネーミアは歴史から観念を「taking over」したと責められることになったのである。しかし、政治生活における観念や原理の役割に対する彼の過少評価は、批判者とは逆の推論過程によって、むしろ人間行動に対する彼の厳しい評価の結果であった。

ネーミアが、政治行動を導く観念や論理の役割について、なぜ懐疑的になったか、自ら述懐しているのである。

「政治における人間性について、ウォーラス自身の結論は、大抵の人々の政治的意見のほとんどが、経験によって検証された推論の結果ではなく、習慣によって固着された下意識的なし半意識的推論の結果であるということであった。そして、彼は政治研究者が人類の主知性を誇張する傾向に対して戦いを挑むよう訓戒したのである。……しかし、現代の我々は、ウォーラスに沿って、はるか遠くまで旅してきた。……それ以来、我々は、個人や集団における固着について、心理的な置換や投影について、また解決不能な内的矛盾の外出化について学んできた。……また、一見知的な教義の起源や性格に関する自己偽暲が他人を欺くこと、隠された強い情念が精神力を鋭くときずまし、一見冷く透徹した容観性を作り出すことなどを学んでき

た。……こういった人間の心理について段々と気づいていった必然の結果が、いわゆる政治的観念に対する態度の変化となったのである。」

したがって、彼にとっては、名譽革命の諸原理でさえ、一八世紀においては、がっての情動は衰えてしまい、かわききった教義、あるいは、ただか無害で陳腐なきまり文句にみえたのである。

ネーミアは、一七六〇年の政治に人々をかりたてた動機を分析した際に、自己利益と野望を発見した。彼は、自由と安全といったホイッグ原理を助長するための熱情は発見しなかった。しかも、その欠如に対して、彼は遺憾を感じることがなかった。さらに、また、人々は抽象的な理念や原理を支持すべきだとか、さらに、現実をその理念に適合させるよう努力すべきだとか説教する信者に対しては、不十分な価値しか認めなかった。しかし、その廉で、ネーミアは彼の仕事から精神を抜きさったのだと批判されてきた。ネーミアは、この批判に自ら答えるのである。

「意識的な政治思想に、一世紀前あるいは半世紀前にさえ附与されていた重要さを与えることは、全く不可能なように思われる。歴史は、本来的に、そして、成長するにしたがって、人

間の心や人間性によって作られる。しかし、人間の心は、かつてその最も高貴な属性と思われていた合理性をもっては働かないのである。……不十分なデータに基づく厳格な論理的結論は、致命的なほど危険である。特に、そういった業績が尊大に行われる時には危険なのである。政治における我々のデータは、必然的に乏しくかつ断片的なものである。そういった限界のなかでさえも、我々が擬似科学的な仕方でも意識的に検閲し熟知できる事実は、下意識のうちにあるもののほんの破片でしかない。それゆえ、人間は政治的教義やドグマで人間の心の自由な働きをふさいでしまうことが少なれば少ないほど、人間の思考にとってより望ましいのである……」⁽⁶⁾

ネーミアは、右のようなことを書きはしたが、いわゆる『歴史理論』といったものには用がなかった。彼は、その主題については、たった一つの試論——『歴史』——を書いただけであった。

右の解答なるものも、批判に対する彼の反論というよりは、彼自身の体験の述懐といった性格のものであった。彼は、歴史家はできるだけ真実に近く到達すべきよう試みるべきだと考えてはいたが、歴史という実際の織物は捉えどころのないものであった。彼は、基本的には、歴史家が真理を知りうるなどとは信じていなかったのである。

彼は、歴史記述に心理学を採用することについて、重大な留意が必要であると述べている。

「疑いもなく、歴史記述にとって、特に伝記にとって、最も重要な前進の一つは、現代心理学の知識によってなされるであろう。しかし、それを適用するには、注意が必要なのである。無資格の執刃者には、死体さえまかされてはならないのである……。しかし、熟練者にとってさえ、手に入りうる心理学的データは、たかだか、断片的な映像をもたらすだけである……。我々は、人間の行為が大抵は理性以外の要因によって条件づけられていることを知ってはいるが、実際には、その反証が明確に確立されるまでは、それらの合理的性格を仮定しなければならぬ……。証明されず、そして、ほとんど計り知れない深みについて気がつけば、政治における人間性の問題にアプローチする際、我々は謙遜と慎重さを要求されるのである」⁽⁶⁾

ネーミアが彼の時代における最も『実践的な歴史家』であったこと、シオニズムに対する熱情的な献身によって彼自身の生涯のどれだけ多くを犠牲に供したかを想起するとき、さきに引用した政治における観念に対する彼の懐疑的な態度の述懐は、まったく奇妙な感じさえあたえるのである。彼は、その述懐の末尾で自己の信条を語るのである。

「ある政治哲学者たちは、この国——英国——において、現在、政治全般についての議論が欠如していること、疲労にみちた小休止であることに不満を述べている。具体的な問題のために実際の解決は求められるが、他方、綱領や理念が両政党によって忘れられているという。しかし、私には、この態度は、偉大な国民的成熟さを示しているようにみえる。そして、政治哲学の働きによって、その成熟さが長く邪魔されないうまでであることを願うのみである。」

また、ニール教授の『エリザベス朝時代の下院議会』を書評した文章でも、次のように述べるのである。

「ニール教授は、『制度的病状の現代においては、英国議会の歴史的研究は、一六世紀などという遠い昔のことであるが、現代の我々の関心からまったく疎遠ではありえない』と書いている。たしかに、歴史は、その前駆的症状に対する矯正済のようにはみえる。その症状は、大かた、非歴史的アプローチ、有機的に生長してきた制度についての不十分な理解、型にはまった目的から構築されたものにほとんど必然的な奇形のために起るのである。この国においては、生得的な制度的保守主義が、利発で慢心した改革者流の論理に対して、彼らの生きた有機体を防禦する役を引きうけている。けれども、その天性の防禦は、歴史の鑑識力と意識的な思考によって強固にされるのが肝要

であるように思われる。」⁽⁸⁾

この二つの文章には、彼の極端なまでの〈historical detachment〉が示されているのである。この態度は、彼が一八世紀英国における政治の営みや制度の進化過程を扱う際、彼の記述の基調をなすものである。そして、彼が一八世紀の英国社会に引きつけられたのは、恐らく、その時代が最後の時代、つまり、支配階級たる〈leisured classes〉が、後の自由主義を特徴づけた観念の狂信から解放され、秩序ある落ち着いた社会で、道理をわきまえた権力の追求に従事できた時代であったからである。英国は、〈methodical or logical nation〉ではなかったからである。

人間は、しばしば、過去の重荷が堪えきれないものになる時、先例や慣習の暗雲を払いのけようと立ち上がる。そして、一方では、歴史に訴えながら、他方では、意識的に過去との断絶を試みるのである。しかし、一国民の生活様式——〈les moeurs〉——は、意思の働きあるいは勅令的な宣言によっては変形されえないのである。しかも、そのような試みは、かえって事態の混乱へと導くのである。ネーミアによれば、計画された変化は、生活の限られた扇面に面することができただけであって、より広いはね返りを予測することはほとんど不可能なのである。

「フュージョン」(organic change)つまり、ゆっくりと試験的な段階をふんで進む経験主義的な実践の疑いもない優位性があるのである。もちろん、人間の社会は、無意識的な生長の可能な有機体ではない。生長のいかなる段階でも、意識的な思考や理論が邪魔に入る。しかし、それらの意識的な思考や理論は、環境から負わされ、実地において達成される再調整を促進するよりは、むしろ妨げる方が多いのである。⁽⁹⁾

ネーミアは、この観点から、一八世紀英国の選挙制度の不合理性を告発し、それにかえて明瞭かつ徹底した代表制の地図を描こうとした一九世紀の改革家たちに、次のような問いを發するのである。

「バラの大多数における選挙権の状態は、(proprietary type of politics)を助長する傾向にあったが、かりに、その目的のために、選挙権を与えられていない、Iversonの民衆がバラの議会代表制を使おうと望んだとしても、そのバラを所有する人間の専有権の主張には、なにか道義的につじつまの合わないことでもあるであろうか……。ひと度、厳格に規定された目的が人間の活動に設定され、人間の活動が明確な形式に固定された場合には、儀式的形式が目的に対する献身を犠牲に發展する。その形式は、それ自身の独立した生命を獲得し、生長して複雑化する。そして、元来の意味や目的が忘れられるのである

。チベット人が、回転礼拝器を使用した唯一の国民ではない。人間の諸々の活動がその公言された目的に対してもっている相互関係は、大概の領域で、あいまいで不確かなものであるため、人は一体物事がいかにして達成されるのかといぶかしく思うのである。恐らく、これが解答であろう。ほとんどの仕事で、人間性が千のうち三点を獲得し、経験上これが公平な平均点であることを学べば、我々自身とはまったく異なった時点に関するのみ、行方不明の九九七点をつかむことができるのである。いかなる選挙制度の結果も、個々の代表からなる議院ということがある。それは代表者たちが奇妙なそして見当違いな『選挙』制度を通じて選ばれたからではなく、主として国の政事に関わり、それゆえ「political nation」を形造っている社会に属しているからである。⁽¹⁰⁾」

英国の総理大臣や内閣の役割にしても、誰かが計画した底のものではなかった。理論も感情も、その初期の形成期には、それらに対して敵対的であった。

「観念や制度には、固有の論理がある。そして、いくつかの条件を所与され、それらは単に一時的あるいは偶然的なものであるとしても、後になってまったく別の堅固かつ永久的な基礎に基づいて再現する形式は生まれるであろう。秋早くに北極からくる思いがけない冷気の到来は、時たま、よごんだ水たまり

や池を薄い氷の表面で被うことがある。そして、冬まだきに、一見、氷すべりができるような様相を示すかもしれない。それは、あるいは、きたるべきものを予期させるであろう。しかし、この最初の氷りは、とにかく、重みの試練には堪えられないのである……。私は、わざと、時ならぬ春よりも初冬の例を選んだ。しかし、それは、感傷的な想像をそのかすためではない。いわゆる立憲政体の方向にあるいかなる出発も、固定的な発展によって追跡されるものは、必ずしも生命の賦与者ではないからである。」⁽¹¹⁾

また、政党の発展に関しても、さまざまな国民性、社会的組織、伝統の差異を克服する制度の発展に固有の論理があったのである。

「明確な定義の可能な綱領が欠如している場合には、實際政治の観点からみれば、誰がトーリーで誰がホイッグであるかを云うことはますます難しくなる。しかし、それらの党派の基礎を形造った型あるいは人的関係が消失していたことを意味しているのではない。党派は、いつの時代でも、知的教理よりもむしろ型や人的関係に基づいている。有罪の判決や疾病はだまっていって身に振りかかるとはならないが、さまざまな名称は、人間の精神的身体的状態に対してつけられるのである。他方、大衆

運動や伝染病は、共通の社会的ないし宇宙的基礎をもっているのである。つまり、人格化された病弊や観念を扱う鬼神学よりも、司運星の周期性を臆断する占星術の方がより道理にかなっているのである。ホイッグズとトーリーズとの分化は、以前と同じように、そして、英国の政治体に現在もなお存在しているように、一七六一年にも存在していた。その分化は、気質や見解に、社会的な型に、そして、古い人的関係や伝統に潜在していた。しかし、ある特定の問題に焦点が合わされてはいなかった。それゆえ、政治において明快な仕切り線を示さなかったのである。古い争点は使い古され、他方、人的政治が、ジョージ三世の即位によって、混乱へと投げ込まれたのであった。そして、この人的政治は、以後の二十年の過程で段々と政党政治に置き代えられてゆくのである。」⁽¹²⁾

そして、なによりも、ネーミアが一八世紀英国政治の序論を書くとき、その〈unreformed House of Commons〉のための弁明に筆をはしらせているのである。

「英国の社会史は、下院議員の構成、あの独特なクラブ、いつでも公衆の側の同意をなんらか表現する選挙によって記述することができるであろう。いかなる時代においても、下院は真に非代表的であったことはない。なぜなら、現代に関しても、選挙の結果は、主として、選挙区や選挙民次第というわけでは

ない。生きた諸力が形式を押し分け、必要を満すための姿をとるからである。六一五名の各士が下院を構成すべく決定されれば、諸々のインタレストや党派はそのなかに夫々釣合いのこれた重みを獲得するよう期待されるのである。しかし、代表の観念や政治体の性格は、時代とともに変化し、それとともに下院の社会構造も変化するのである。⁽¹³⁾」

しかし、ネーミアによれば、人口の多いメンバーにおける腐敗は、選挙制度の結果ではなく、選挙民の政治的〈naïveté〉の結果であった。ロットン・バラは、一八世紀英国の統治組織の必要部分であり、それにもまして、腐敗は英国民の自由や独立性の証差でさえあった。もしもロットン・バラや閉じたメンバーがなければ、一七六一年の下院は、実際、ランデド・ジェントリだけをほとんど排他的に代表することになっていたのである。が、それらを通じて、いろいろな世代の〈nouveaux-riches〉が下院に入っていたのであった。かくして、下院は、広くかつさまざまな行政的経験の貯蔵庫、芽をだしかけた政治家のための討論場、時代の社会的経済的発展の反射鏡となったのである。つまり、ネーミアによれば、一見一八世紀英国国制の脆弱面とみられていたものが、実は、その強さの部分をなすものであったのである。

- (1) Richard Pares : *King George III and the Politician* (1953) p. 4.
- (2) Herbert Butterfield : *George III and the Historian* (1937) p. 207.
- (3) A. J. P. Taylor *op. cit.*
- (4) "The Namier View of History", *Times Literary Supplement* 1953. Aug. 28
- John Owen : "The Namier Way", *New Statesman* 1962, Jan. 26
- J. H. Plumb : "History and Biography" in *Men and Places* (1966) Pelican Books pp. 239-245
- Harvey C. Mansfield : *op. cit.*
- (4) *Human Nature in Politics, in Personalities, and Powers* (1955) pp. 1-4
- (5) *ibid.* p. 5
- (6) *ibid.* p. 3
- (7) *ibid.* p. 7
- (8) *The Elizabethan Parliament, in Avenues of History* p. 103
- (9) *History, in Avenues of History* p. 2-4
- (10) *Structure, pp. 134-4*
- (11) *England, p. 45*
- (12) *op. cit.* pp. 179-180
- (13) *op. cit.* p. 3

七、歴史的アプローチ

かつての歴史家と現代の批判者との違いについて、次のようにいわれることがある。

「従来の歴史家は、分析よりも物語的通史に、〈why of history〉よりも〈how of history〉により多く集中してきた。しかし、この数世代の間、『なぜ』が『いかに』よりも重要な問題とみなされてきた。もちろん、それはより重要な問いには違いない。しかし、『いかに』が確立されるまでは、『なぜ』は答えられないのである……。歴史のこの物語的側面が無視され、『いかに』が不完全に会得される限り、『なぜ』の問いに対して与えられる解答も不完全なのである。歴史の眺望が全体としてみられ、不自然な部分に分解されえないものとすれば、本末を転倒する学者、ともかく問題にならないような事象の継起について雑解な説明を提出する学者がいる。しかし、歴史におけるいかなる発展も、自足的あるいは自己説明的ではない。完全な専門化は、学識にとっては本質的であるが、理解にとっては致命的なのである。それゆえ、〈General history〉は、あらゆる問題の初めと終りにあるのである。」⁽¹⁾

ハーバート・バターフィールドによれば、物語的通史は、人々の

政治展望を拡げるような歴史、〈statesmanship〉や大きな事件の進行を扱う歴史のことであった。他方、構造分析的歴史では、事件は、それらが生起する社会の型に関係づけて分析されるのである。社会は、単に物語が語られる一種の背景ではなく、歴史記述における積極的な協働者、歴史的説明の重要なよりどころとなった。歴史は、もはや、単なる軌跡あるいは物語の流れではなく、同時に、基本構造によって理解されねばならなくなった。政治は、顕微鏡の下で、政治と社会、統治と構造的秩序との関係を通じて、つまり、構造に対する関係づけや感覚をもって研究されるのである。しかし、バターフィールド自身は、構造分析と物語、研究と物語とが結び合わさったものを理想的な歴史記述だと考えていた。そして、この理想的な歴史という基準に於いて、ネーミアの歴史記述を批判するのである。

「ネーミアの強さは、大量な詳細図の研究に基づいている。しかし、その詳細図がある明確な型を与えられる地点、いくつかの一般化が作り出される地点にまで到達したとき、つまり、政治状況や勢力地図の設計に必然の戦略地点について決定するに到った時、歴史的再構成という作業に含まれる固有の誤審、つまり『解釈』という問題からどの程度まぬがれうるであろうか。

単なる周囲の状況とか構造の分析では、政治という事象を説明できない。討論の過程、国民感情、国家的危機の存在などが多くの人々の政治行動に影響を与えるところでは、挿話的な出来事そのものに顕微鏡をあて、議会討論そのものの過程を注意深く研究することが必要なのである。しかし、分析的歴史では、この面が無視され、それらに人々が与えたる独自の重要性が喪失してしまう。つまり、構造や既存利益についてはあまりに多くのことが述べられるが、物語の重大な地点での議論に明らかに入り込んでいる高度の政治的考慮については、ほとんど述べられない。しかし、多くの事柄は、人間がさまざまに異なった選択をしたと容易に想像できるような行為の領域、人間の選択にかかっている。それゆえ、歴史的説明のためには、人間が自らの行動をどのように熟慮し、選択するかを観察し、人々の間で起った事柄の継ぎを檢討しなければならぬのではないか。

ネーミアは、政治の操作的側面、派閥間の相互作用に過度に注意を集中しているが、そういった分析の方法は、それ自身の〈occupational disease〉をもつのではないか。つまり、ネーミアは、政治家の行う事柄から知的な内容を洗い流してしまいが、むしろ、観念や意識的目的といった枠組みが、政治史に一貫性を与え、単なる断片化から政治史を救出することになるのではないか。『真相』と呼ばれるような類いの証書書類からのみ歴史を書く試みは、歴史に一貫性と意味を与える公言された政治目的を腐食させてしまうのではないか。

ネーミアは、個人における意識的意図や目的の重要性を過大評価することに対し抗撃し、歴史過程に含まれるパラドックスへの注意を喚起した。たしかに、それは歴史的理解にとつての基本的前提である。しかし、ネーミアの考え方を極端におし進めた時、そのような歴史研究がなぜ人々にとって重要と考えられねばならないのかという疑問がもち上る。もしも、歴史が、一連の偶然や局面としてのみみられるならば、研究すべきなものも存在しないし、出来事の間にはいかなる相互関連も存在しないことになるらう。⁽²⁾

ここでは、ネーミアに対して向けられたバスターフィールドの批判ないし疑問を二つにまとめて扱ってみたい。

その一つは、『物語』対『分析』といった歴史記述の方法について、ネーミア自身はどのように考えていたのであるかという問いである。ネーミアは、歴史記述の主題について、次のように述べている。

「歴史記述の主題は、人間事象、つまり、行動する人間、起った出来事、その出来事が起る仕方である。時間と空間のうちに固定された具体的事象と、それらが人々の思考や感情のうちにもっている下地とである。普遍的なものや一般化された事柄ではない。事象は、それを細工する人間と同じように、複雑か

つ多様である。人間は、合理的存在であるが、その知識はほとんど充分ではなく、その観念は単に casually 実態と関係づけられているだけであり、人間は理性のみでは決して動かされないのである。⁽³⁾

ここで、まず、歴史の主題が人間事象であるということから、社会的諸側面でみられる人間のあらゆる討究や学問の対象が歴史の主題となるのである。しかし、

「人間の精神は、人間事象を広くかつ釣合いのとれた仕方理解するのに必要なものの断片以上には到達できない。そこで、限界の意識と選択とが歴史家の技能にとって基本的なのである。真の歴史家であることのしるしは、人間事象のもつれに対する分析的洞察力が自己の限界の意識と結び合わさっていることである。⁽⁴⁾

他方、歴史記述の主題は、時間と空間に固定された具体的事象であるから、

「物語が歴史記述の基本的な媒介手段である。しかし、なにを物語るかについての分析的選択によって導かれるのである。歴史家の職分は、画家の仕事により類似しているのであって、

写真家のそれではない。つまり、事柄の本質的なるものを発見し、述べ、えり抜き、強調することである。目に映るものすべてを無差別に再生することではない。歴史記述で重要なものは、大きな大要と、重要な詳細図である。避けられるべきは、関係のない物語を長々とやることである。⁽⁵⁾

『物語』対『分析』という対比は、G・M・トレベリアンの問題であった「歴史は文芸か科学か」という問いの現代的翻訳である。トレベリアンは、歴史は科学であると同様文芸であると考えていたが、いかなる研究方法も過去の実態を十分に視野にさらすには不適切であると意識していた。そこで、彼は、歴史はむしろ文芸的目的や道義的目的をもっていると考え、歴史を詩として書いたのである。⁽⁶⁾

ネーミアは、この問題について次のように述べる。

「歴史は、当然、歴史家の関心と視野によって条件づけられているため、主観的で、個性的である。歴史家の関心は、もしもそれが強烈で誠実であれば、感化力をもちうるであろう。また、歴史家の独創性の試金石は、その関心が説得力あるものか否かである。歴史家の発見は、ひと度述べられたら、疑いなく明白でなければならない。歴史が文芸であるか科学であるかといった議論は、無駄なように思われる。歴史は、医学的な診断

に類似している。多くの経験と知識かつ訓練された精神による科学的アプローチが必要とされる。しかし、最終的な結論は、直観、つまり文芸なのである。」

ここでは、しかし、そういつたいいわゆる『歴史理論』よりも、まず、ネーミアがどのように「物語」を書いたかを見ることにしよう。便宜上、バターフィールドが推賞する物語的歴史家のA・D・ウインスタンレイと比較することにする。

ウインスタンレイは、ジョージ三世即位後の歴史過程を、物語の連続性を維持するために、王冠とホイッグ指導者との闘いとして通覧するのである。

「ジョージ三世が、彼の祖父を奴隷化してきた人々にあえて戦いをいどんだのは、単なるわがままな権力への渴望からではなかった。むしろ、立憲君主として君臨するだけでなく、支配することが己の義務であると心から信じていたからであった。他方、彼の敵対者たちにしても、浅ましい見下げた動機によって行動していたのではなかった。つまり、政党制の原理を確固と信じていたから、ニューカッスルと彼の従者たちは、王権の増大によって民族の安全と議会の支配体制とが脅威をうけるとみたのである。……君主との闘いにおいて、彼らが自己の出世や地位のためではなく、原理のために戦っていたことは、彼

らの誇りとすべきことであった。」⁽⁸⁾

ウインスタンレイは、もちろん、歴史過程に含まれるパラトックスに対する感覚はもっていたが、彼の物語の目的は、「ホイッグズの敗北の原因はなにか」、「勝利の可能性はどこにあったか」、「誰が敗北に対して責任を負わねばならないか」といった教訓の発見にあった。

ネーミアは、『アメリカ革命時代の英国』では、一七六〇年のジョージ三世即位から、一七六一年のニューカッスルとピットによる連立政府、一七六二年のニューカッスルの辞職とピット内閣の成立、一七六三年のピットの辞職とグレンビル内閣の成立まで、いわゆる「ジョージ三世が劃した新秩序の勝利」として記述されてきた時期を扱っている。

「一七六〇年十一月にピットとニューカッスルとの間で始まるゲームは、この上なく見事な悲喜劇のための材料を提供する……。これまで英国を統治してきた者たちの追い出しに立会わねばならない御代のばかげた始めにおいては、歴史の無限の重みを負わせられねばならなかったのである。その歴史の無限の重みとは、追い出しをやり遂げた人間のこれまた猶予のない償い難い恥辱、王たろうとした人の愚行、時代の最も偉大なス

ティツマンの生涯と業績の破産、ローマ帝国の崩壊以来世界に類例をみない帝国の分散であった……。歴史は、ばかげた出発点から始められねばならない。一方、小者たちは、彼らが自ら知っている以上に、はかり知れないほどの卑小なことで、はかり知れないほどの偉大なことをなすのである。」

ネーミアは、これまで多くの議論や政治的論争の的となり、ジョージ三世とビュートによる隠謀と考えられてきた、ジョージ三世即位直後の出来事を「historical comedy」として物語ったのである。議会における陛下の務めは、いつでも大臣たちによって処理されるし、議会の重要性が増せば、それを操縦することのできる大臣たちの重要性も増大する。しかし、「mixed government」の下では、議会の支持を確保するためにも、王の寵愛や信任が必要であった。その際、君主と忠臣との間の関係を否定なく決定づけるものは、人的要素であった。ジョージ三世は、王権の強化という目的をもってしたが、それを達成するために頼らねばならなかった者たちの性格は、しかし、『茶番めいたもの』として記述されるようなものであった。一七六〇年から一七六三年までジョージ三世の大臣を務めた人は、ニューカッスル、ビュート、グリーンビルであったが、ネーミアによれば、ニューカッスルは精神病理学的用語によって記述されねばならないような人物であり、

ビュートは責任ある地位にふさわしいような人物ではなく、また、グリーンビルも嫌疑と気づかいで頭が一杯になっているような人物であったのである。ウインスタンレイは、ビュートの辞職とグリーンビルの指導下で内閣が改造された時を、ジョージ三世治世に新しい劃期を開くもの、つまり、君主とホイッグズとの戦いが一つの結末に到り、ホイッグズが政権から追い出され、ビュートが新しい体制の敵に対して勝利をおさめた時だと記述した。しかし、ネーミアの目を通じてみると、

「フォックスもビュートも、失望し遺恨にたえない人として、政治の舞台から退出する運命にあった。彼らは、彼らの勝利の果実をジョージ・グリーンビルに残してやった。しかし、その闘いが戦われていた最中には、王もビュートも、また、ビュート、ニューカッスル、フォックスにしても、そのグリーンビルに対しては、なんらの価値も認めず、尊敬もしていなかったのである。そして、二年半経った時、今度は、そのあきあきする空威張の人物から王を救出するために、カムベラランドとオボジション・ホイッグが召し出されることになるのである。」

ネーミアは、ジョージ三世即位直後の出来事を「historical comedy」として物語った理由を述べている。

「天文学的距離、星回りが当然とされるような距離からみれば、歴史事象はなんらかの意味を獲得し、印象的かつ退屈な動きを現わすであろう。しかし、精密な単位で観察した場合には、人々の行動は、その重みにおいても価値においても、人々が作り出す結果とはほとんど見合っていないのである……」。権力が大きければ大きいほど、自らの行為の結果を測ることができなくなる。偉大、誠実かつ信仰深い人物を悲喜劇の領域以上の高みに上げるものは、彼が自らの限界を真に控え目に認める場合のみである。」

結局、ネーミアによれば、歴史は、

「クリシュナの神々、盲目のなかにおかれている人間の感情に対していや気を催し、その愚かさをとぼけた目でながめるクリシュナの神々から作られるのである。」⁽¹²⁾

ネーミアに対するバターフィールドの第二の問いは、歴史の研究ないし歴史家の作業の目的や性格をめぐって提出される。バターフィールドは、「ネーミアは、彼の題材の形状と筋を不明瞭にし、入り組んだ詳細図の森の中を探索することによって、より大きな流れを無視した」と批判する。⁽¹³⁾しかし、ネーミア自身は、自らが人間の歴史的経験の全領域を写し出そうとしているなどとは、決して主張していないのである。したがって、ネーミアが苦勞なし

に理解されうるような類いの物語的歴史を書かなかったという理由のみ、批判されるべきではない。彼は、少くとも、あざやかな明瞭さで一八世紀英国政治の舞台の特徴点をはっきりさせたのである。また、多くの安易な誤解をくつがえしたのである。しかし、彼の仕事の主要な部分が伝説の破壊に向けられているために、ネーミアは歴史記述の主要な任務を伝説の破壊と考えていたのではないかという疑問が起るかもしれない。

ネーミアは、ディレッタントやドクトリネアとの対比において「historical approach」を特徴づけたのである。

「ディレッタントとは、自分の仕事よりも自分自身のことを重大に考える人のことである。理論とか思いつきの観念に魅惑されているドクトリネアは、公的場面におけるディレッタントである。反対に、歴史的アプローチとは、知的に控え目なのである。その目的は、状況を内在的に理解すること、諸々な傾向を研究すること、事柄がいかにして動くかを発見することである。そして、歴史の研究によって達しえられる無上の技能は、歴史的な感覚、つまり、事柄がいかにして起らないかについての直観的理解である。いかにして起るかというのは、特殊な知識の問題である。しかし、実際の経験によって支えられていない研究は、めったに歴史家を生み出すことがないのである。」⁽¹⁴⁾

ハーバート・バターフィールドは、「歴史を記述する歴史家の立

場」と「歴史を読む諸者の立場」との中間に立って、「歴史家の知恵をいかにして読者に伝達できるか」といった問題に強く関心を引かれていた。彼は、その観点から、『ホイッグ歴史解釈』⁽¹⁶⁾では、現在の必要、理念、状況に直接参照して歴史を研究する傾向は、説明を歪曲することになると、ホイッグ史家を批判したのである。つまり、歴史の動きがもっている複雑性、予見不可能性、気まぐれ性に対する感覚が、歴史家の知恵であった。他方、『ジョージ三世と歴史家たち』⁽¹⁷⁾では、ネーミアの構造分析的歴史記述や歴史的悲喜劇を、こんどは、ゆきすぎてしまったと批判するのである。従来の物語的歴史は、一つの重要な徳、つまり、政治的、道義的教育という任務を引き受けていたのである。ある歴史的な出来事が後の時代、後の英国の政治的發展に対してもっている重要性を強調し、ステイマンシップについての適切な忠告を与えるという任務をもっていた。そこでは、事実に関する誤審も実践的な真理をもちえたのである。しかし、ネーミアのようにゆきすぎると、一体、歴史はその読者になにを与えることができるかと問いかえさねばならないと述べるのである。この点で、バスターフィールドは、トレベリアンの伝統につらなっていたのである。⁽¹⁷⁾

歴史研究の役割といったことについて、ネーミアはどのように考えていたであろうか。

「固定観念は、精神病患者を打ちつけることによって治療されえない。同様、すぎずき胸いたむ過去は、激情的な行動によって消し去れえないのである。ここで、歴史は、精神分析的役割をもつのである。さらに、歴史は、治療よりも診断の方をよりうまくできる精神分析に類似しているのである。歴史研究がもつ有益な治療的效果は、はるかに小さかったのである。しかし、そうあるべきだというのが、事柄の本性なのである……。歴史研究が効果を發揮すべきだとすれば、大衆の情動や魂を動かさねばならない。また、大衆を教育しなければならぬであろう。しかし、それはいかにしたら可能か。歴史は、大衆になにを与えることができるのか……。〈popularized history〉は、大抵、退屈や単調でつまらないものである。通俗的な歴史、つまり、大衆をしっかりと捉え、引っぱってゆく底の歴史は、大概は、作りごとなのである。通俗化することは、通常、過度に単純化することを意味する……。他方、大衆に影響を与えるためには、歴史は、大衆の熱情や情動に働きかけねばならない。つまり、歪曲された伝説的過去によって、大衆の熱情や情動を大衆が切望する未来へ投影しなければならぬのである。そして、歴史は、狂いのない鑑識力と鋭い理解力の所産ではなく、想像と熱情の所産となるのである……。」

したがって、選択は、鑑識眼による探索や思考を試るか、ぼやけた追憶や珍奇な解釈といった単なるおしゃべりをするかの

「歴史の道徳」⁽²⁾

- (1) C. V. Wedgwood: Truth and Opinion (1960) pp. 14-15
- (2) Herbert Butterfield: George III and the Historians pp. 193-215
- (3) History, in Avenues of History p. 1
- (4) ibid. p. 8
- (5) ibid. p. 8
- (6) G. M. Trevelyan, Clio, A Muse in Clio A Muse (1949) New Impression, pp. 140-176
- (7) "History", ibid. p. 8
- (8) D. A. Winstanley: Personal and Party Government (1910) England pp. 130-131
- (9) England p. 416
- (10) England p. 129-30
- (11) op. cit.
- (12) H. Butterfield: George III and the Historians pp. 204-215
- (13) "History" in Avenues of History, p. 4
- (14) H. Butterfield: The Whig Interpretation of History (1931)
- (15) H. Butterfield: George III and the Historian (1957)
- (16) G. M. Trevelyan: "History and the Reader" in An Autobiography and other Essays, (1949) pp. 52-67

H. Butterfield: History and Human Relations (1951)
 (2) "History" in Avenues of History p. 5

あとがき

以上において、筆者がこの論稿のために提出した問いを一応扱ってきた。しかし、実は、筆者のネーミアに対する最も重要な問いかけがもう一つ残っているのである。さきに引用した文章のなかで、ネーミアは、「歴史は、当然、歴史家の関心や視野によって条件づけられているため、主観的で個性的である」とも、「実際の経験によって支えられていない研究は、めったに歴史家を生み出さない」とも述べていたのである。そこで、ネーミアをして歴史研究へと赴かせた個性と冒険心の中身はなんであったのだろうか。彼のあくことなき探求心を支える信念とはなんであったのだろうか。物語的通史家の名匠であったトレベリアンの場合は、彼の流麗な筆致が彼自身に背くこととなったと批判されるが、彼の歴史と文芸に対する二重の託身、自由主義に対する自信に満ちた献身は、ほとんど遺産として親譲りされたものであった。筆者のネーミアに対する問いとは、「ネーミアはなぜ一八世紀の英国政治生活に関心をもったのであろうか」「彼のその関心や歴史

記述の方法は、ユダヤ系ポーランド人という彼の血統とどのような関係があるのか」「彼の熱情的なシオニズムに対する献身と英国に対する関心とはどのように関連しあっているのか」といった内容のものである。

ネーミアの同世代人で、英国史研究において自らを確立したもう一人の外国の歴史家は、ヴィノグラドフであった。彼が選んだ研究領域である封建制は、より多くの対応物をヨーロッパにもっていた。しかし、ネーミアの主題である一八世紀の英国政治生活は、独自の性格をもつものであった。それは、なにか別のものを参照することによって説明できないものであった。もちろん、一八世紀の英国政治に関するネーミアの新たな発見が、一八世紀における他の立憲君主国——ポーランドとハンガリー——に関する彼の経験によって助けられてはいたであろう。しかし、彼は、意識的に類比を申し立てようとはしなかった。彼は、真にジョン・ブルの仕方、英国を比較不可能なものとみなすことを好んだのである。また、彼は、ヴィクトリア時代の国制上の用語で説明しようとは試みなかった。彼は、〈Practical question〉で問うたのである。そして、彼は、ありのままの姿を、しばしば、非政治的な解答を与えたのである。ネーミアは、高ぶった原理が政治生活において重きをなす唯一のものではないということを示すことをあらわに示

すことから始めて、最後には、それはまったく重きをなさないという確信をほのめかすところまで到ったのである。彼は、政治的信条の激突によって引き裂かれた時代に生き、彼自身がしばしば熱心なシオニストであったから、そういった原理がほとんど重きをなさない世紀を発見して狂喜したのかもしれない。しかし、そういった、ネーミアの内奥に関する問いは、ここでは、十分に答えられないし、また、この論稿の初めに附した限界を越えることにもなるのである。ただ、彼の著作に現われた彼の信条の吐露、幾人かの証言を通じて、いくつかの手掛りを与えることができるだけである。

ネーミアが東ヨーロッパの生れであるという事実が、彼を偏見から解放された英国観察者にしたということは、容易に想像できる。しかし、ネーミアの外国人性は、より複雑なものであった。彼は、単にポーランド・ジェントリーの出であるという以上に、ユダヤ系ポーランド人であった。彼が九歳になった時、自分がユダヤの血統であることを発見するが、それは彼の以後の人生経路を決定づけた啓示ともいえるべき衝激であった。ポーランド史の宿命であった無政府状態は、それだけで、安定した英国へ向かわせるに充分な誘因となりうるものであった。それに加えて、自分が

ユダヤの出であることは、ポーランド・ジェントリ層のなかで、
 さえも、完全には受け入れられないことを意味した。そこから、
 彼の身元や伝統に対する探索が、後のシオニズムに対する献身だ
 けでなく、一八世紀英国の安定した自信に満ちた社会に対する彼
 のあからさまの尊敬に導いたことは、充分ありうることである。

彼は、〈Lut Mensch〉の悲劇について、熱く訴えるのであ
 る。

「己自身の土壌に根ざし、その社会構造に完結され、それゆ
 え適度に自信に満ちた国民にとつては、数の問題は、強さと安
 全を意味する。しかし、我々にとっては、パレスティナの外
 で、その数の問題はいつでも危険を生み出すのである。これは
 〈Gaiuth〉つまり、流浪者の災禍であつたし、またあるのであ
 る。国民は、自らのものと呼べる土壌以外では生成できない
 し、また、すべきではない……」。

一九三二年に、ポーランドのユダヤ人問題は最もやかましい
 問題のようにみえた。ナチの突発的な噴出の衝激が通り過ぎた
 時、ユダヤ人問題は、ふたたび、明るみに出されることになっ
 た。しかし、我々は、一九三二年の同じ目で問題をみつめるこ
 とができようか。その時には、我々の主要な努力は〈Lutmen-
 sch〉との戦いに向られて然るべきように思われた。〈Lutmen-
 sch〉という翻訳不可能な言葉は、己の足下にしっかりと地

歩をもたない人々、教育や専門的職業をもたない人々、資産や
 きまった雇用をもたない人々、そして、宙ぶらりんに渡り歩い
 て生活する人々を意味していた。過去長い間、彼らの数は、東
 ヨーロッパの狭くぎゆうぎゆう結めの特落部にぞつとするほ
 ど増大してきていた。そして、一九三二年の時には、我々の最
 初の仕事は、この型の人々を堅実な働き手に変ることだと考え
 た。しかし、一九三三年のドイツにおける経験は、自己の専門
 領域に関して第一級の席を占めていたユダヤ人さえ、一夜にし
 て〈Lut Mensch〉へと追い払われることを我々に教えたのであつ
 た。彼は、もはや、自分の生まれた土地で自己の専門的能力の
 行使を許されず、他のいかなる国においても、その仕事を始める
 ことが許されなくなったのである。我々すべての〈Lut Mensch〉
 の悲劇は、東ヨーロッパにおける失業者の個々のユダヤ人の悲
 劇よりもはるかに大きかつた。それは、なによりも、一国民と
 して、我々が我々の足下に堅固な土壌をもっていないという事
 実に帰因するものであつた。人間は、共同体の外で生きること
 はできない。しかも、自らの共同体においてのみ真に安全なの
 である。その共同体は、⁽²⁾最高度に完全無欠の意味で、己自身の
 ものでなければならぬ……」。

ネーミアを一八世紀の英国に引きつけたものは、ユダヤの血統
 という彼の境涯だけではなく、現代という時代に対する彼の洞察
 とも結び合わさっていた。

「土壌に根ざした人々にとっては、通常、彼らの村落あるいは地所、彼らの教区、彼らの州に対する忠誠の体系が存在する。彼らにとっては、ネーションは当然のごとく連合的な構造からなっている。伝統的な信仰や世襲的な絆が存続している。階級や生活様式が団結を規定している。そして、物事は、村落や小さく古風な町で個別的かつ具体的である。しかし、現代の大都市では、人々は匿名的になり、零に等しくなり、型にはめて組織化される。思考は、ますます抽象的となり、いくつもの一般化へどよぎなくされる。相統された信仰はかき乱され、古い絆は破壊される。そこには、空虚、不確実性、隠された恐怖が残される。それらを人は合理的思考によってともかく制しようとして試みるのである。彼は、伝統の束縛から解放された抽象的かつ平均的個人の諸権利を声高かに主張することからはじめ

て、自らを群衆のなかに統合させる。その集教主義的人格は、大衆運動へと退化するのである。大衆は、根なし草の避難所である。精神的諸価値の崩壊は、原子の分裂と同じように破壊力絶大の過程である。それは、あらゆる堰を爆破する悪魔的な力をとき放つのである。」⁽³⁾

ネーミアによれば、自由とは安定した社会における緩やかな発展の果実であり、それは、個人の諸権利に対する尊重に基づき、共同体の生活や習慣に深く根ざされたものであった。自由は、その起源においては、アリストクラティックな観念であり、自己意識

的な個人、自分自らと自分の地位について確かで、それゆえ完全にくつろいだ個人の観念であった。この観点からみると、一八世紀の英国社会は、彼にとっては、この上なく魅惑的な世界にみえたのである。

「人々の集団の土地に対する関係、組織化された共同社会の領地に対する関係が政治史の基本的内容を形造る。諸々な共同体の相争う領土主張が、意識的な国際史の大きな部分を構成する。主として人々の土地に対する関係から生まれる社会的階層制や激動が、必ずしも充分に意識されてはいないが、国内史の大きな部分をなしている。都市化され産業化された状態の下でさえも、土地の所有は、通常臆測されている以上に、重きをなしている。いかなる人々にとっても、生地が彼の〈The Giving Mother〉であり、その土地の上に建てられる国家が彼の〈The Giving Father〉なのである。いずれかを拝受できない国民は、隆盛できないのである。二千年の間、ただ一つの国民が生きのびてきた。それは、孤児の身であったが、私自身の国民、ユダヤであった。しかし、我々は、天与の法のなかに国家の權威を納め、約束の地に母国の観念を秘めてきた。そして、Mount Sinaiからの数世紀を通じ、我々は、我々の地 Aens Israel に向ってきたのである。いずれかを棄れば、我々は国民であることをやめることになる。だから、ふたたび両者に生命を与え、もう一度本来の国民になろう……」

空間の所有には、ほとんど神秘的ともいえる力がある。土地所有者の強さをなすものは、資源の掌轄だけではない。彼は、自らのものと呼べる世界に地歩をもっている。その世界を局外者から隔離することができ、その世界に自らを根づかせることができる。それは、丸太に対する樹木の優位性なのである……。

一八世紀の英国では、ランドド・クラスの優越性は、地代や有閑に基づいていただけでなく、それ以上に、土地と国家に自らの持ち分をもっていた人々の、くつろいだ釣り合いのとれた存在にであったのである。⁽⁴⁾

一九六〇年のネーミアの死まで一二年間の親交をもった、J・L・ターモン⁽⁵⁾は、「学究と一個の人間、英国のジェントルマンと東ヨーロッパのユダヤ人という奇妙な結合をもったネーミアについて知れば知るほど、私の彼に対する賞賛の念が強くなった。それは、畏敬、恐れ、そして、たまには反語によって特徴づけられていた」と述べる。彼は、右のネーミアの引用を引き合いに出して、ネーミアの二つの深層的な熱情を「歴史的な英国に対する悶えとも羨望ともいえる愛着と、シオニズムに対する試験的な情熱、いいかえれば、アウトサイダーの根に対する渴望と、放浪者の錨に対する切望とであった」と示摘する。これは、ネーミアの出生の秘密、つまり、「ユダヤ系ポーランド生れ」から由来し、

「ネーミアの宿命は、いつでも、また、どこでも、常にアウトサイダー (a resident alien) であった」のである。ネーミアは、多くの人々によって、不治のスノップと考えられることがあったが、彼がアリストクラシーに対して払った敬意には、太く低い浪漫的な調べが、アウトサイダーの旋律が流れていたのである。また、ネーミアの発見——理想主義的な志望のない利己的な寡頭制による統治——は、表面だけみれば、冷笑的な結論に到達したようにみえる。しかし、それは、ネーミアが伝えようとした結論ではない。彼にとって最も重要であったのは、アリストクラシーの政治的独立性の伝統であった。それは、国民のあらゆる階級にとって模範となるべきものであったのである。

「ネーミアは、歴史を精神分析したのだ」と述べる、I・パーリン⁽⁶⁾は、ネーミアを精神分析する。ネーミア自身は、「マルクスは、半山師の典型的なユダヤ人である」とつぶやいていたが、パーリンは、むしろ、マルクスとの類比においてネーミアを扱うのである。ネーミアにとって、「歴史においても、個人生活においても、自己理解がすべてであった。それは、慎重な経験主義、個人生活や社会生活のよじれ、かつ、もうろうとした屈曲に諸々の仮説を絶え間なく適合させることによってのみ達成されうるものであった。」この冷静で、劇化されていない経験主義的人生観は、

転向したユダヤである父、その感傷的な自己欺瞞に対する反逆から生まれたものであった。この点で、英国は、その政治的伝統のうち、シンシズムとも呼ばれるようなある種のリアリズムをもっていた。ネーミアの英国アリストクラシーに対する関心、一八世紀英国議会の議員の歴史に対する関心は、こういった生活様式のネーミア的な理想化であった。また、ネーミアのスノップ性はブルースト的なものであったのである。

ネーミアは、完全な英国人になろうと、全身全霊で努力したが、なりえたであろうか。この問いについて、ペリオール時代からの友人であった、A・トインビーは、次のように答える。⁽¹⁾「彼は、感情的には、完全な英国人に帰化した。しかし、知的には、決して帰化したわけではなかった。もしも、彼が精神においても百パーセントの英国人になるのに成功していたら、おそらく、英国史学界にそれほど偉大な貢献をしなかったであろう。」結局、ネーミアが成功した秘密は、彼が二つの目——ラビ風目の目とポーランド・ジェントリーの目——をもっていたことにあるのである。

ある人物がなんたるかを発見しようとする時に、その個人についての伝記の詳細を集めることがネーミア的な方法だとすれば、その方法は、ネーミア自身の場合には適用できない。筆者によ

って限定されたこの論稿の試みにとってさえ、ネーミアが、『ジョージ三世即位期における政治構造』のために、なぜアイスキュロスからの銘句を附したか、その謂は謎のまま残されている。

「爪の曲った猛禽どもの飛び交いに、明確な判じ方を示してやった、どのようなのが吉兆で、それが凶兆かを、また、その一々がどんな習いをもっているか、また、どれとどれとが互同土敵であるか、また、仲好くして一緒にいるかを。」

アイスキュロス

「縛られたプロメテウス」

- (1) G. M. Trevelyan: "Autobiography of an Historian" in *An Autobiography and other Essays* (1949) pp. 1-51
- (2) "The Jew in the Modern World" in *In the Margin of History* (1931) pp. 51-77
- (3) "Nationality and Liberty" in *Vanished Supremacies* (1958) p. 37
- (4) *England* pp. 18-19
- (5) J. L. Talmon: "The Ordeal of Sir Lewis Namier" *Commentary* March 1962, pp. 237-46
- (6) Arnold Toynbee: *Lewis Namier, Historian*, Encounter 1961 Jan pp. 39-43
- (7) Isaiah Berlin: "Lewis Namier: A Personal Impression" in *A Century of Conflict 1850-1950* ed Martin Gilbert (1966) pp. 215-230

Sir Lewis Namier の略歴と著作

一八八八年、六月二十七日

Ludwik Bernsztajn Namierowski は、Galicia の地主で、ユダヤ人の行政官であった父 Josef Bernsztajn の息子として、生まれる。その後、Namierowski 家は、ウイーン、ローザンヌに移る。

一九〇八年

ルドウィックは、英国に渡り、London School of Economics にゆく。そこで、A. L. Smith (Senior tutor at Balliol) に会い、Balliol College, Oxford に所属する。

一九一二年

Oxford B. A. First Class Honours in History “The Imperial Problem during the American Revolution” の研究を始める。

一九一三年

East Galicia の故郷を訪れ、父の友人をたよってアメリカへ渡る。

一九一四年

英国に帰り、帰化して Lewis Bernstein Namier となる。Private

in the 20th Royal Fusiliers に名を連ねる。

一九一五年から一八年

Political Intelligence Department of Foreign Office に徴募される。

一九一八年から二〇年

representative of British firms in Austria and the United States となる。

一九二〇年から二二年

Lecturer in Modern History, Balliol College

一九二二年から三三年

再度アメリカに渡る。

一九二九年から三二年、一九二九年から四五年

Political Secretary of the Jewish Agency for Palestine.

一九三二年から五三年

Professor of Modern History, Manchester University

一九三三年から三四年

Ford's Lecturer, Oxford. “The King and his Minister, The Cabinet, The Prime Minister”

一九四四年

Raleigh Lecturer, British Academy. “1848: The Revolution of

the Intellectuals”

一九四六年から四七年

Waynflete Lecturer, Magdalen College, Oxford

一九五〇年

History of Parliament の編纂に参与。

一九五二年

Romane's Lecturer, Oxford. “Monarchy and the Party System”

Creighton Lecturer, London “Basic Factors in the 19 th Century

European History”

一九五三年

Academy of Arts Lecturer. “King George III”

一九五四年

Enid Muir Lecturer, Durham. “The Country Gentlemen in Parliament”

一九五八年から五九年

Leslie Stephen Lecture, Cambridge. “Charles Townshend”

一九六〇年八月一九日

死去。

著作

The Structure of Politics at the Accession of George III (1929)

England in the Age of the American Revolution vol. I. (1930)

Skyscrapers (1931)

In the Margin of History (1931)

Additions and Corrections to Sir John Fortescue's Edition of the Correspondence of King George III (1937)

Conflict (1942)

1848 : The Revolution of the Intellectuals (1944)

Facing East (1948)

Diplomatic Prelude 1938-9 (1948)

Europe in Decay, 1936-1940 (1950)

Avenues of History (1952)

In the Nazi Era (1952)

Personalities and Powers (1955)

Vanished Supremacies (1958)

Crossroads of Power (1962)

History of Parliament (1966)